

Ver. 2018-12-22

# 幻想論

宮下英明 著

# 幻想論

## 本書について

本書は、

<http://m-ac.jp/>

のサイトで書き下ろしている『幻想論』を PDF 文書の形に改めたものです。

文中の青色文字列は、ウェブページへのリンクであることを示しています。

# 目次

0 導入	1
0.1 はじめに	2
0.2 本論考の構成	4
<b>I 幻想</b>	<b>9</b>
1 存在論	11
1.1 幻想の根底	12
1.1.1 幻想の理由：〈生きる〉の制御	13
1.1.2 商品経済体制	14
1.2 「幻想」の存在論	16
1.2.1 幻想の契機	17
1.2.2 比較：「記号論」	18
1.2.3 人間が主題の幻想論の場合	20
1.2.4 ことば	22
1.2.5 「色即是空」	23
2 幻想学——幻想解体学	27
2.0 要旨	28
2.1 幻想学の構え：ニヒリズム	30
2.1.1 「ニヒリズム」とは	31
2.1.2 科学はニヒリズムがスタンス	33
2.1.3 ニヒリズム対進歩主義	34
2.2 幻想学の方法	36
2.2.0 要旨	37
2.2.1 進化論	38
2.2.2 生態学	41
2.2.3 「テクノロジー」	43
2.2.4 「個の多様性」	45

2.2.5 知の体系的編成	47
---------------	----

<b>II 共同体幻想</b>	<b>49</b>
3 共同体幻想	51
3.1 「共同体幻想」	52
3.2 共同体幻想の生活	53
3.2.1 しがらみ・重し	54
3.2.2 学校教育	55
3.2.3 無常	56
4 共同主義	59
4.1 「共同主義」	60
4.2 画一主義——異形排除	61
4.2.1 異形存在の理	62
4.2.2 潔癖症	63
4.2.3 御都合主義	64
4.2.4 例：ヤクザ潰滅キャンペーン	65
4.3 商品経済体制の共同主義	67
4.3.0 要旨	68
4.3.1 栄達主義	69
4.3.2 安心主義	70
4.3.3 世直し主義	72
4.3.4 栄達主義と世直し主義の弁証法	75
5 進歩主義	77
5.1 「進歩主義」	78
5.2 進歩主義の諸契機	81
5.2.1 テクノロジーの進化	82
5.2.2 進歩主義知識人：「知行合一」	83
5.2.3 グローバリズム（欧米スタンダード）	85
5.2.4 政策：「競争原理の導入」	86

6 保守主義	93
6.1 「保守主義」	94
6.2 保守主義の諸相	96
6.2.1 反科学	97
6.2.2 反商品経済	98
6.2.3 内面主義	101
6.2.4 「保守」の意味の移ろい	102
7 民族主義	105
7.1 「民族主義」	106
7.2 「昔々わが民族は……」の創作	108
7.3 エスノセントリズム	113
7.3.1 創世神話からエスノセントリズムへ	114
7.3.2 「国学」の国粹主義	115
7.3.3 エスノセントリズムの<危険>の構造	117
7.4 「日本人」括りの虚妄	119
7.4.0 要旨	120
7.4.1 文化の進化	122
7.4.2 境界文化「アイヌ」	124
7.4.3 漂泊民文化「サンカ」	127
7.4.4 難民・窮民文化	132
7.4.5 カウンターカルチャー	134
7.5 人類学者の不能	135
8 宗教	149
8.1 信仰パフォーマンス	150
8.2 科学と宗教のダブルスタンダード	152
<b>III 疎外幻想</b>	<b>155</b>
9 疎外幻想	157
9.1 「疎外幻想」	158

10 メルヘン	161
10.1 メルヘン	162
10.1.1 カタルシス	163
10.1.2 ノスタルジア	164
10.1.3 「自由 freedom」	166
10.1.4 「勝利 victory」	168
10.2 例：「アイヌ」	169
10.2.1 桃源郷<アイヌ>	170
10.2.2 鬼<和人>	176
11 「正道」	189
11.1 「正道」幻想	190
11.2 例：国学の「古道」	191
11.2.1 国学の心理	192
11.2.2 「やまとだましひ」	194
11.2.3 復古神道	196
11.2.4 「大人」	198
12 「革命」	201
12.1 「革命」幻想	202
12.1.1 「革命」の構図	203
12.1.2 死屍累累	205
12.1.3 アジテーター	206
12.1.4 「正義」	208
12.2 例：60年安保のブント	209
12.2.0 要旨	210
12.2.1 西部邁『六〇年安保』	212
12.2.2 「権力・自由」	215
12.2.3 非行者	218
12.3 例：幕末維新の平田門人	221
12.3.1 「復古」幻想	222

12.3.2	平田門人	225
12.3.3	島崎藤村『夜明け前』	227
12.3.4	幻想と現実のダブルバインド	229
12.3.5	憂国	230
13	「現成」	233
13.1	「現成」幻想	234
13.1.1	「自己組織化する系」	235
13.1.2	「神」	236
13.1.3	「無為」	238
13.2	例：国学の現成論	239
13.2.1	現成論	240
13.2.2	実践論	243
14	「あの世」	247
14.1	救済の「あの世」幻想	248
14.2	スピリチュアリズムの「あの世」幻想	249
14.3	「あの世」存在論の思考停止	250
15	「虚無」	253
15.1	「虚無」幻想	254
15.2	「神は死んだ」	255
16	閉じ	261
16.0	おわりに	262

## 0 導入

0.1 はじめに

0.2 本論考の構成

## 0.1 はじめに

ひとは、事物に意味・価値・目的を立てる。

この「立てる」は、「強いて立てる」であり、作為である。

作為の理由は、この作為によって人の系の運動がつくられることである。

系は運動する系であり、運動は<励起され続ける>を以て保たれる。

そして励起となるもののうちに、<意味・価値・目的を新調する>がある。

意味・価値・目的の新調は、作為である。

<わざとする>である。

そしてひとの<生きる>は、この<わざとする>で成っている。

実際、このように<生きる>を仕立てることが、<生業う>である。

しかし、ひとは、<わざとする>に自覚的であるわけではない。

ひとは、自分たちの仮構に逆に騙されてしまう。

仮構が<真実>になってしまい、これで自らを縛るようになる。

著しくは、一つの<真実>に自分の一生を支配させてしまう。

そして終局が破滅だったりする。

これは、「一生を棒にふる」である。

ひとをこのような迷いから覚ますことばがある。

「幻想」である。

単純なようだが、このことばを持っていると持っていないでは、ずいぶ

ん違ってくる。

幻想は、「幻想か？」の自問で、簡単に「幻想」と気づくものだからである。

そして「科学」のことばを合わせ持てば、効果はさらに上がる。

幻想で自分の一生を損なうのはつまらないし、その幻想を他に振りまいて被害者を増やしてしまうのはもっとまずい。

肝要は、幻想を弁<sup>わきま</sup>えることである。

ここで「弁える」の意味は、「機能・癖・危うさを理解する」である。

ここで「弁える」の意味は、「機能・癖・危うさを理解する」である。

本論考は、この「弁える」を講じてみようとする。

## 0.2 本論考の構成

本論考は、3部構成につくる。

第1部は、存在論である。

人/生物は、所与(「自然」)から、<存在>を立てる。  
これは、「自然」から、自分の「世界」をつくるということである。

存在は、存在として立てたものである。  
存在は、<立てる>の作為に拠る。  
この構造において、存在は<幻想>である。

人/生物は、通時的には、進化するものである。  
そして、共時的には、「個の多様性」を現す。  
幻想は、この変化の相で捉えるものである。  
幻想は、進化し、そして共時的に多様である。

第2部は、ヒト種の幻想タイプとして、共同体幻想を講ずる。

人は、社会的動物である。  
「社会的」の意味は、「共同体の員として生きる——他の生き方は無い」  
である。

人がつくる幻想は、共同体の員としてつくる幻想である。  
それは、自ずと共同体的である。

幻想のこの面を指して、本論考では「共同体幻想」と呼ぶことにする。

共同体幻想の様態は、人の進化と「個の多様性」に応ずる。  
共同体幻想は、進化し、そして共時的に多様である。

「進化」の内容は、「自己組織化」である。  
——共同体幻想は、自己組織化する系である。  
この運動のモーメントに、「主義」タイプの幻想がある。

「共同体の員として生きる——他の生き方は無い」には、「共同体の員を  
志向する」が含蓄される。  
人の幻想の根底は、共同主義である。

生物は、可能なだけ種の個体数を増やすような生殖をする。  
この結果、生物の<生きる>は、<かつかつに生きる>になる。  
生物は、<かつかつに生きる>を生き抜く。  
ひとの場合、<生き抜く>の内容に、<よりマシにするよう工夫する>  
が入ってくる。  
ひとは、自ずと進歩主義になる。

ひとは、進歩主義で、いろいろ試みる。  
これにより、一つの共同体の中では、これまでの生活様式・価値観が壊  
れ、そして複数の共同体の間では、これまでの勢力関係が壊れる。

この破壊で被害を受ける者・被害を危惧する者は、対抗・対決の構えに  
なる。



対抗・対決が共同体内部の場合、この構えは「保守主義」である。

破壊が共同体の外からの場合、あるいはそのように捉えられる場合、対抗・対決の構えは民族主義の形をとる。

民族主義は、正のフィードバックをダイナミクスにする。

こうして、「エスノセントリズム」レベルにまで高まる。

エスノセントリズムの好例に、「国学」がある。

本論考では、「幻想」の便利な題材として、「国学」にしばしば言及することになる。

第3部は、疎外幻想を講ずる。

人の〈生きる〉は、〈共同体の員として生きる〉である。

〈共同体の員として生きる〉は、〈共同体の員として生きることを強いられる〉である。

この強迫に、人は苦しむことになる。

そして、「救い」「解放」「自由」「定め」等々の幻想をつくり出す。

このタイプの幻想を、本論考では「疎外幻想」と呼ぶことにする。

強迫に対し、人は「対決」と「受容」を両極とするスペクトラムを示す。

本論考では、前者を「革命と自由」、後者を「宗教」の標題で、それぞれ論じるとする。

# I 幻想

1 存在論

2 幻想学——幻想解体学

# 1 存在論

## 1.1 幻想の根底

## 1.2 「幻想」の存在論

## 1.1 幻想の根底

### 1.1.1 幻想の理由：＜生きる＞の制御

### 1.1.2 商品経済体制

### 1.1.1 幻想の理由：＜生きる＞の制御

生物は、＜生きる＞を行う存在である。

＜生きる＞は、障碍・危険がいっぱいである。

＜生きる＞は、＜障碍・危険を乗り越えて生きる＞である。

この＜生きる＞ができるために、生物は様々な機能を進化させてきた。

そのような機能のうちに、＜幻想をつくる＞がある

### 1.1.2 商品経済体制

人のいまの〈生きる〉は、〈商品経済体制に生きる〉である。  
ひとは、商品経済体制に生きるための幻想を、様々につくる。

商品経済の系は、ややこしい系である。  
よって、この中で醸成される幻想も、ややこしいものになる。

商品経済は、どんなふうややこしいか。

商品経済は、生活資源が商品になる。  
生活資源は、金で買う。  
〈金で買う〉をするためには、金を持っていなければならない。  
よって、〈金を得る〉をしなければならない。  
こうして、商品経済の〈生きる〉は、〈金を得る〉である。

〈金を得る〉が〈生きる〉になると、変なく生きる〉が続々と出てくる。  
ニッチをさがすからである。

商品経済は、無くても生きられるものが商品になる。  
これを売るために、策略が用いられる。  
策略の主要部分は、〈騙し〉である。

また、〈金を得る〉は、〈100円の投資で1円の利益を出す〉とく  
1億円の投資で1億1円の利益を出す〉が同じになる。  
こうして、高級イチゴの温室栽培、マグロの養殖のようなことが、起こっ

てくる。

これは、自然資源の蕩尽である。  
自然資源の枯渇が見えていても、蕩尽をやめられない。  
これが、商品経済である。

商品経済は、〈商品回転の上昇スパイラル〉が健康な形である。  
経済政策は、これを実現しようとする。  
経済政策は、インフレ政策がこれの健康な形である。

以上は、どれも無意味なことに見える。  
しかし、無意味を言っていたら生きられない。  
そこで、合理化の機序として、無意味隠蔽の幻想が紡がれることになる。  
そして、商品経済の無意味が多面的である分、幻想も多面的なものになっ  
ていく。

## 1.2 「幻想」の存在論

### 1.2.1 幻想の契機

### 1.2.2 比較：「記号論」

### 1.2.3 人間が主題の幻想論の場合

### 1.2.4 ことば

### 1.2.5 「色即是空」

## 1.2.1 「幻想」の存在論

人/生物は、所与（「自然」）から、〈存在〉を立てる。

これは、「自然」から、自分の「世界」をつくるということである。

存在は、存在として立てたものである。

存在は、〈立てる〉の作為に拠る。

この構造において、存在は〈幻想〉である。

人/生物は、通時的には、進化するものである。

そして、共時的には、「個の多様性」を現す。

幻想は、この変化の相で捉えるものである。

幻想は、進化し、そして共時的に多様である。。

### 1.2.2 比較：「記号論」

自然の存在Xは、生物Aと生物Bでは意味合いが異なる。

——例えば、Aにとっては食べ物で、Bにとってはシェルターであるというふうに。

このことを、「各生物は自然物を素材に独自の世界を形成している」と読むことにする。

世界の要素は、自然物とは区別される。

——Xは、Aにとって食べ物であるが、存在として「食べ物」であるわけではない。

世界の要素を、何と呼ぶべきか。

「記号」と呼ぶのが、記号論である。

本論考は、「幻想」と呼ぶことにする。

本論考が「記号」を用いないのは、記号論は形而上学だからである。

記号論は、認知科学の合理主義をさらに論理的な体系へとまとめようとする企図である。

したがって、合理主義がある程度うまくいく存在階層が、記号論の領分である。

逆に、合理主義の通用しない存在階層は、記号論の領分ではない。

そして、生物Aの世界は、合理主義の通用しない存在階層が一般的になる。

生物Aの世界の論考は、どのような形式になるか。

本論考は、生物Aの生態の論述——「生態学」——に代える。

(実際、論考を観念論に陥らせない形式は、生態学に限る。)

これは、生物Aの生態を一つの「自己組織化する系」「複雑系」と捉え、自己組織化のダイナミクスを論述するというものである。

### 1.2.3 人間が主題の幻想論の場合

本論考が主題化する「生物A」は、「人間」である。

人間は、人間以外の生物とずいぶん違っている感じがする。

この「ずいぶん違っている」は、「社会性動物」の概念を間に挟むと、距離が縮まる。

社会性動物は、「公のため」という行動タイプを現す。

アリがミミズとずいぶん違って見えるところは、ここである。

またある種の社会性動物は、「栄達のため」という行動タイプを現す。

例えば、トド。

人間の場合は、さらに「義のため」が加わる。

「公のため」「栄達のため」「義のため」は、「公のための自己犠牲・同族殺し」

「自分の栄達のための同族殺し」「義の栄達のための同族殺し」を含む。

そしてこれらは、複合する。

このとき、社会性動物は、命の値段がすごく安く見える。

特に「義」が危険なものになる。

恣意的だからである。

これが、殺す・殺されるの合理化に用いられる。

このとき、命の値段は最も安くなる。

例えば、共産主義革命の死屍累累は、共産主義体制が成ってからの粛清（義を装う戦い）において桁違いになる。

明治維新も、倒幕の戦いよりも、新政権樹立での仲違い（義を装う戦い）

で、多くの死者を出す。

人間が主題の幻想論は、ここで挙げた「公」「栄達」「義」が幻想の大力テゴリーになる。

本論考は、このカテゴリーの網羅を立場とする。

一方、「義」に重点をおく。

人間を誤らせ危うくする幻想はこれがいちばん、ということで。



### 1.2.4 ことば

生物の<生きる>は、無意味である。

生物の<生きる>は、「ただ生きる」である。

人間は、無意味なく生きる>に、ことばを立てて意味をつける。

人間は、こうしないと生きられないように、己を進化させてきた。

この結果は、幻想とことばの1対1対応模様である。

ちなみに、人間進化のこのレベルが、プラトンの「イデア」、ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』の土俵である。

### 1.2.5 「色即是空」

日本人だと、最も知られている幻想論は「色即是空」の『般若心経』である。

そこで、これに触れておくのが、幻想論の導入として便利である。

山を見れば木は見えず、木を見れば山は見えない。

存在は、存在階層を上や下にシフトすると、消える。

逆に、存在階層のシフトによって、無かったものが現れる。

存在とは、そのようなものである。

これが「色即是空 空即是色」である。

「色即是空 空即是色」は、意味深なことを言っているのではなく、当たり前のことを言っている。

存在（「色」）を指定するのは、認知（「受想行識」）である。

そこで、「色即是空」の応用として、「無受想行識」が出てくる：

<色>即是空 → <受想行識>即是無

ブッダは、求道者である。

「色即是空」「無受想行識」の幻想論は、途上である。

しかし、後世の者は、ブッダを完成者にする：

三世諸仏，依 般若波羅蜜多 故，得 阿耨多羅三藐三菩提。  
tryadhvavyavasthitā sarvabuddhāḥ prajñāpāramitām  
āśrityānuttarām samyak-sambodhim abhisambuddhāḥ.

過去、現在、未来の三世にいます目ざめた人々は、すべて、智慧の完成に安んじて、この上ない正しい目ざめを覚り得られた。

故 知, 般若波羅蜜多 是 大神咒, 是 大明咒, 是 無上咒, 是 無  
等等咒, 能除 一切苦, 真實 不虛。

故 說 般若波羅蜜多咒, 即 說咒 曰,

tasmāj jñātavyah prajñāpāramitāmahāmamtro  
mahāvidyāmamtro 'nuttaramamtro 'samāsamamamtrah  
sarvaduhkhapraśamana-mamtrah satyam amithyatvāt  
prajñāpāramitāyām ukto mamtrah, tadyathā,

それゆえに人は知るべきである。智慧の完成の大いなる真言、  
大いなるさとの真言、無上の真言、無比の真言は、すべての  
苦しみを鎮める真言であり、偽りが無いから真実であると。

その真言は、智慧の完成において次のように説かれた、

羯諦 羯諦 波羅羯諦, 波羅僧羯諦, 菩提薩婆訶。

gate gate pāragate pārasamg ate bodhi svāhā,

往ける者よ、往ける者よ、彼岸に往ける者よ、彼岸に全く往け  
る者よ、さとりよ、幸あれ。

「羯諦 羯諦 波羅羯諦, 波羅僧羯諦, 菩提薩婆訶」は、幻想論構築の営み  
へのエールないし喝と受け取るべし。

→ 『般若心経——「色即是空 空即是色」の存在論』

幻想論は、アイデアを言って「完成」ではない。

内容こそが、幻想論の本格的課題である。

幻想論の立場は、「求道者ブツダ」である。

ブツダの時から今日まで、ひとが積んできた科学的知識は膨大である。

いまの時代の幻想論は、この知識の質量に見合うだけのものでなければ

恥ずかしい。

## 2 幻想学——幻想解体学

### 2.0 要旨

### 2.1 幻想学の構え：ニヒリズム

### 2.2 幻想学の方法

## 2.0 要旨

幻想を理解しようとする営みは、学問である。  
これを「幻想学」と呼んでおく。

幻想学は、幻想の正体を暴く作業である。  
即ち、幻想解体学である。

幻想学は、哲学ではない。  
哲学ではあり得ない。  
実際、幻想を扱うことは、人 / 生物の<世界>を扱うことである。  
ここで、人 / 生物が<生きる>において所与（「自然」）から独自に構築するものが「世界」である。  
よって、幻想学の対象は、人 / 生物の総体に亘り、「自然」に亘る。  
行うことは、科学である。

哲学は、自閉である。  
己から出発し、己の中で終始する。  
哲学は、「科学せずとも存在は語れる」を立場とする。  
このようなのを「夜郎自大」という。

幻想学は、人が大事にしている幻想を無にするものになる。  
人を慮<sup>おもんばか</sup>る者は、幻想学に入れない。  
幻想学に入る者は、ニヒリズムを構えとする。

幻想学は、人 / 生物の学全般のいわば総括である。  
この企図は、「大風呂敷を広げる」になる。  
そこで、基本的な枠組の押さえが、肝要になる。  
これは、「方法論」ということになる。

## 2.1 幻想学の構え：ニヒリズム

### 2.1.1 「ニヒリズム」とは

### 2.1.2 科学はニヒリズムがスタンス

### 2.1.3 ニヒリズム対進歩主義

### 2.1.1 「ニヒリズム」とは

幻想は、挫折する。

実際、虚構は挫折へ導くのが道理である。

挫折してある者は、「幻想の解体」の形を以て、挫折を反省する。

「ニヒリズム」とは、この構えのことである。

そこで、悟り・達観は、ニヒリズムである。

実際、悟り・達観は、共同体幻想からの解脱である。

科学も、ニヒリズムを方法論にしていることになる。

ひとは、ニヒリズムを何かよくないものと思っている。

どうしてこうなるのか。

ニヒリズムをネガティブに意味づける者がおり、そして共同体幻想がそれだからである。

ニヒリズムは、共同体幻想の解体である。

共同体幻想は、ニヒリズムが自分にとって危険なものであることを察知する。

そこで、ニヒリズムを却けようとし、その方法としてニヒリズムをネガティブに意味づけるのである。

西洋科学の歴史は教会との闘いであったが、それは、科学がく教会のやっ

てきたことを元も子も無くしてしまう営み>になってしまうからである。

実際、科学は、言えば元も子も無くなることを言ってナンボである。

## 2.1.2 科学はニヒリズムがスタンス

所与（現前）を理解しようとする営みを、科学と謂う。

生物の<生きる>は、所与である。

生物は、生きるようにできているから、生きる。

<生きる>に意味・価値・目的をつけるのは、作為である。

この認識は、科学である。

一方、この認識は、ニヒリズムと呼ばれる。

ニヒリズムと科学の関係は、生物の<生きる>を存在の<存る>に置き換えても同じである。

<存る>に意味・価値・目的をつけるのは、作為である。

この認識は、科学である。

そしてこの認識のスタンスは、ニヒリズムである。

翻って、科学は、ニヒリズムがスタンスである。

### 2.1.3 ニヒリズム対進歩主義

ニヒリズムは、否定的に取り上げられるのがふつうである。

否定的な取り上げ方をするのは、進歩主義である。

進歩主義は、ニヒリズムを「無為」と定めて、自身を「知行合一」に見立てる。

進歩主義とニヒリズムの違いは、〈生きる〉に意味・価値・目的をつけるかつかないかである。

ニヒリズムは、「自分は生きるようにできているから生きる」の〈生きる〉が「行」である。

「自分は生きるようにできているから生きる」が、ニヒリズムの「知行合一」である。

意味・価値・目的は、作為である。

幻想である。

幻想は、早晚綻ぶ。

進歩主義者は、早晚挫折する者である。

これが傲慢な者だと、世の中に幻滅する。

謙虚な者だと、己の愚を省みる。

しかしひとは、進歩主義である。

無意味を生きることは、不安でありそして不安定だからである。

安定させるために、生きることに意味・価値・目的をつける。

幻想で生きる。

かくして、科学を知らない時代はアニミズム、科学の時代は進歩主義となる。

## 2.2 幻想学の方法

### 2.2.0 要旨

### 2.2.1 進化論

### 2.2.2 生態学

### 2.2.3 「テクノロジー」

### 2.2.4 「個の多様性」

### 2.2.5 知の体系的編成

## 2.2.0 要旨

幻想は、多種多様である。

幻想学は、この多種多様を扱えてナンボである。

「多種多様」を扱う方法は、「外延—内包」。

多種多様を、〈生成のダイナミクス〉の外延と見る。

こうして、幻想学の方法論は、「〈生成のダイナミクス〉を取り出す」の方法論である。



## 2.2.1 進化論

生物の〈生きる〉は、無意味である。

一方、人間は〈生きる〉に意味を立てる。

人間は、〈生きる〉に意味を立てないと生きられないように、己を進化させてきた。

生物の〈生きる〉が無意味であることは、生物の〈生きる〉を観察するとわかることである。

生物が生きるのは、生きるようにできているからである。

この意味で、生物の〈生きる〉は〈生かされている〉である。

実際、生物の〈生きる〉は、化学反応の系で物質が化学変化するようなものである。

ひとは己の〈生きる〉に意味を立てるが、その〈意味を立てる〉こと自体、既に「化学反応」である。

生物の〈生きる〉を化学反応に見立てるとき、その「反応」を「適応」と呼ぶ。

これは、「化学反応」のうちでも特に「自己維持する化学反応」である。

「自己維持」には、「カラダの組織の新陳代謝」と「己そのものの新陳代謝——生殖により己のクローンをつくる」がある。

生物は、この「自己維持」を成すように自己組織化する系である。

生き物の生滅は、《積み木で建物をつくり、そして壊す》みたいなものである。

積み木の数は限られていても、〈つくって壊す〉は無際限である。

実際、生き物の生滅の「無数」は、想像できない「無数」である。

一瞬の時にも、想像できない「無数」の生き物が生じまた滅している。

さらに、この〈つくって壊す〉が、進化するわけである。

生物の〈生きる=生かされる〉は、つねに進化している。

ひとは、進化を何かに向かうプロセスにしようとする。

実際これが、ひたが〈生きる〉に意味を立てるやり方である。

ヘーゲルが歴史を〈絶対理念〉実現のプロセスに見立てるという具合。

しかし、進化は、ただの偶然の積み重ねである。

そして、何かの実現に向かうプロセスではない。

偶然の累積のプロセスである「進化」は、ひとの理解のかなわないものである。

生物進化学のテキストには、「系統樹」の絵が載っている。

この絵はミスリーディングである。

「系統樹」は現前の生物の先祖溯行を表現したものであり、ここには絶滅した種が描かれていない。

実際、絶滅した種は無数にあったわけであるから、これの表現など思いもよらないことである。

生き物の生滅の無数、種の生滅の無数は、最大級の「無数」である。  
人間が立てる<生きる>の意味の解体作業は、このクラスの「無数」に  
思いを致すことが第一歩である。

## 2.2.2 生態学

幻想は、人/生物の幻想である。  
人/生物の幻想は、その人/生物の生態の中にある。  
そして、物のような存在ではない。

実際、幻想学が或る幻想をとらえるとは、人/生物の生態の或る局面を  
幻想の存在に解釈するということである。  
生態の捉えが、先ずある。

こうして幻想学は、生態学の上に築く格好になる。

「生態」とは、以下のように考えるものである。

ひとの<生きる>は、<生業う>である。  
<生業う>は、《<生きる>を素直に引き受ける》である。  
——そうでない<生きる>は、虚構である。

商品経済体制では、<生業う>は<供給者を生業う>である。  
このとき、需要というものがはじめからあるわけではない。  
商品経済体制では、需要は喚起するものである。  
特に、無くても済ませるものの需要を喚起しこれに供給するというのが、  
商品経済体制での<生業う>である。

<生業う>は、生存競争である。  
実際、生物の<生きる>は、<ぎりぎり生きる>になる。

<ぎりぎり生きる>になるのは、生物の個体数は生きられるぎりぎりの個体数に落ち着くからである。

窮民救済キャンペーンが延々と続くのは、<生きられるぎりぎりの個体数>は窮民を設けるからである。

実際、窮民が無いとは、個体数が増える余裕があるということである。このとき、個体数が増える余裕が無くなるまで増える。その個体数は、窮民が多くてどうしようもないとなる個体数である。

生存競争は、系の均衡の範囲内で、なりふり構わぬものになる。

<無くて済ませるものの需要を喚起する>は、なりふり構わぬものになる。

即ち、「詐欺」になる。

わかりやすい例が、「無菌」ビジネスである。

「無菌」は、騙しである。

人は、無数の菌と共に生き、そしてこの共生関係によって生きて生かされている。

こうして、「大人の世界は汚い」になる。

しかし「大人の世界は汚い」は、「生物の世界は汚い」と言っているのと同じである。

「大人の世界は汚い」に挫折した子どもは、つぎは大人を引き受けるのみである。

### 2.2.3 「テクノロジー」

生活のモチベーションは、《己の生活を向上させる》である。

そこで、向上に資すると思しきものが現れれば、それを求める。

テクノロジーは、この類である。

ひとはテクノロジーを求め、テクノロジーに順う。

テクノロジーは、競って求められる。

己の生活の向上は、他との競争だからである。

この構造において、テクノロジー開発の営みも、<己の生活を向上させる営み>のうちとなり、競争的営みとなる。

こうして、テクノロジーは、<正のフィードバック>のダイナミクスを以て進歩する。

<正のフィードバック>が作り出す運動は、螺旋上昇運動である。

この運動に抗える者はいない。

一方、螺旋上昇運動は、永久運動とはならない。

即ち、運動の系が早晚ぶち切れることになる。

科学とテクノロジーの関係について。

科学とテクノロジーの関係は、「科学はテクノロジーに貢献する」ではない。

科学はテクノロジーに貢献するが、それは科学の一面である。

テクノロジーは、生活を豊かにすることを目的に、開発するものである。

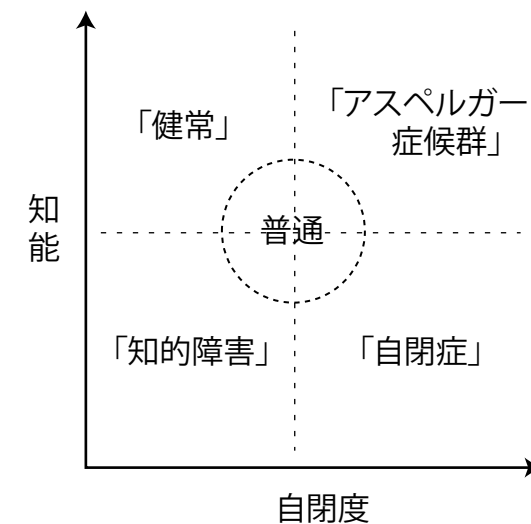
一方、科学は、ひとが己を知ることがを目的に、探求するものである。  
 科学はこのようなものとして、テクノロジーの営みの無意味性を暴露する関係にある。  
 テクノロジーの理由である「生活を豊かにする」が幻想であることを、暴露するわけである。

## 2.2.4 「個の多様性」

幻想は、「個の多様性」で考えるものになる。

「個の多様性」は、卑近な意味で考えると幅が小さくなる。  
 幅が小さいと、思い込みをやって間違えることになる。

「幅」は、「スペクトル」でイメージする。  
 スペクトルは、何の軸をどんなふうにするかで、いろいろになる。  
 つぎは、一つの例である：



一般に、「個の多様性」は、自己組織化する系の根本である。

例えば、種の進化。

いつの時代にも「ニュータイプ」(「新人類」)現象がある。  
ニュータイプを供出する裾野は、個の多様性である。  
新しい時代とニュータイプは、正の相互フィードバックの関係にある。  
したがって、ニュータイプを現す DNA が、存在有利な DNA となって、  
世に敷衍する。  
これが、「進化」である。

「進化」の説明概念は「突然変異」だが、これは多分にミスリーディングである。

DNA は、複製ミス、外的破壊、そして生殖によって、絶えず新しい組み換えを発生する。

これが「個の多様性」の内容である。

そして、系の自己組織化のダイナミクスが、多様な個を裾野にして優位個を淘汰する。

このとき、「優位個」は一通りではない。

系は複雑系であって、「優位個」は何通りにも存在することになる。

進化は、枝分かれであり、そして枝の淘汰である。

——進化は、一本道ではない。

## 2.2.5 知の体系的編成

幻想学は、構想である。

企図である。

いまは、論点先取のつもりで、大風呂敷を拡げている。

実際、幻想学は、諸学の総合の趣きになる。

諸学のやっていることは、一面、幻想づくりだからである。

所与へのアプローチに役立つ幻想を、せっせと開発しているわけである。

こうして幻想学は、総合学として、知の体系的編成が併行する。

これを、手につくところからやっていく。

「知の体系的編成」の目論見は、昔からずっとある。

例えば、ヘーゲルの『大論理学』。

今が昔と違うのは、知識の幅・深さが桁違いになっているということである。

ヘーゲルは「哲学」で済むと思ったが、今の者は「諸科学の網羅」を負う。

## II 共同体幻想

3 共同体幻想

4 共同主義

5 進歩主義

6 保守主義

7 民族主義

8 宗教

### 3 共同体幻想

#### 3.1 「共同体幻想」

#### 3.2 共同体幻想の生活

### 3.1 「共同体幻想」

ひとは、共同体の員として生きる。

——共同体の員でないという生き方はできない。

そこでひとは、自分の〈共同体の員として生きる〉を実現する幻想を、各種醸成する。

それらは、「共同体幻想」ということになる。

### 3.2 共同体幻想の生活

3.2.1 しがらみ・重し

3.2.2 学校教育

3.2.3 無常



### 3.2.1 しがらみ・重し

ひとは、共同体幻想とこれのシステムで身動き取れないようになる。  
しがらみとなる人や物を増やしていくことで、硬直化するのである。

ひとは、危険が迫っても、おいそれとは逃げられない。

しがらみのものを捨てられないからである。

逃げるときも、持って逃げようとする。

——そして、往々にして、その持ち物があだとなる。

### 3.2.2 学校教育

社会の成員（「大人」）になるとは、共同体幻想のシステムに収まることである。

子どもは、大人にしていくべきものである。

これをするのが、学校教育である。

学校教育の務めは、子どもを共同体幻想に生きる者に仕立てることである。

共同体幻想は、あくまでも幻想である。

意味・価値・目的は、作為であり自己欺瞞である。

こうして、学校教育の行うことは、騙しである。

「無意味？」の問いを抑圧し、現れなくする。

学校教育の難しさは、ひとを騙すことの難しさである。

学校教育の難しさは、本質的なものである。

実際、「無意味？」の問いは、完全には抑え込めない。

気を抜くと、現れてくる。

共同体幻想のシステムに収まっていない状態は、不安定な状態である。

何かの拍子に、「無意味」の意識があたまをもたげてくる。

己の<生きる>を無意味にしてしまうと、生きるのが困難になる。

これが、「若者の自殺」である。

### 3.2.3 無常

文明は、得と失が表裏になる。

得が大きければ、失も大きくなる。

得のみを残せないことは、紙の表と裏の一方のみを残せないのと同じである。

ひとは、規範（道徳・行儀）や制度の導入を以て、失を無くそうとする。この結果は、失を減らしたぶんこれまでの得が減り、新しい得ができたぶん新しい失が現れる、というものである。

規範・制度は、己の無理構造によって綻ぶ（自己解体）。

新しい規範・制度の導入を、「改革」という。

「改革」は、規範・制度のライフサイクルを経緯する。

「改革」は、早晚厭きられる。

ひとは「改革」を捨て、元に戻る。

「改革」は、元の木阿弥で終わる。

一方、ひとは、世代忘却する。

現前に失を見て、「改革」を企てる。

こうして、ひとは、「改革」を企てるを繰り返す。

この〈行ったり来たり〉の繰り返しは、無駄というものではない。

生き物の〈生きる〉は〈絶えず変わる〉であり、動物であれば〈絶えず動く〉である。

ひとは、絶えず動いていなければならない。

このとき、自動的に〈絶えず動く〉があれば、ありがたい。

そしてその自動的に〈絶えず動く〉の最も単純な形式が、〈行ったり来たり〉なのである。

ひとが「改革」を企てると捨てるを繰り返すのは、これが自動的に〈絶えず動く〉になってくれるからである。

そしてこの〈行ったり来たり〉は、新陳代謝を兼ねる。

## 4 共同主義

4.1 「共同主義」

4.2 画一主義——異形排除

4.3 商品経済体制の共同主義

## 4.1 「共同主義」

ひとは、共同体の員として生きる。

——共同体の員でないという生き方はできない。

<共同体の員として生きる>に対する構えには、個人差がある。

積極的な構えは、共同主義ということになる。

ただし、共同主義を却けて共同体に生きることはできないわけであるから、共同主義はスペクトラムで考えるものになる。

集団は、自己組織化する系であり、その時その時の定常的均衡を実現する。

現前の共同主義の様は、共同主義のいまの定常的均衡相である。

共同主義を論ずる者は、つぎの二タイプに分かれる：

### a. 科学

生物の<生きる> (<生きる>の無意味性) の側から、  
人の共同主義を論ずる

### b. 政治

共同主義の内容を調整しつつ、共同主義をリードする

前者は、「人類学」「生態学」の趣きになる。

一方、「教育学」のような「実践科学」を自称する「学」は、後者ということになる。

## 4.2 画一主義——異形排除

### 4.2.1 異形存在の理

### 4.2.2 潔癖症

### 4.2.3 御都合主義

### 4.2.4 例：ヤクザ潰滅キャンペーン

### 4.2.1 異形存在の理

共同体は、正統と異端の別を生む。  
多数派が普通者として正統になり、これに対する異形者が異端になる。

共同体は、必ず正統と異端の別を生む。  
したがって、「この布置には理がある」と見ることになる。  
「天の配剤」「神の見えざる手」というわけである。

実際、正統・異端の別は、共同体のダイナミクスの現れである。

共同体は、自己組織化する系である。  
自己組織化は、「化学反応」といったものである。  
化学反応は、異なる元素・分子が存在してこそのものである。  
共同体は、「個の多様性」があってこそのものである。

「個の多様性」は、いろいろな形に集約する。  
正統・異端の別れは、それらのうちの一つである。

### 4.2.2 潔癖症

異形の存在には理がある。  
この理は、見えにくい。

普通者にとって、異形者は何者かわからない者である。  
わからないので、気味が悪い。  
異形は、普通者の目障りになる。

異形者にとってしぜんな行動は、普通者には迷惑行為になる。  
普通者は、異形者をバイ菌視するようになる。  
普通者は、異形に対し潔癖症になる。  
潔癖症になった普通者は、バイ菌退治の趣で、異形潰滅キャンペーンを  
想う者になる。

異形潰滅キャンペーンは、政治・マスコミ・産業界と正のフィードバック  
を形成する。  
政治・マスコミ・産業界は、普通者の思い（「民意」）に乗ってナンボ  
だからである。

また彼らは、異形潰滅キャンペーンの仕掛け人でもある。  
異形潰滅キャンペーンは、商売になるからである。

### 4.2.3 御都合主義

共同体は、ひとの様々な生業が歯車となって、維持されている。

その中に、異形者が就く生業がある。

逆の言い方をすると、《これに就くことは、異形者になること》となる生業がある。

普通者は、異形者を疎んじつつも、このタイプの生業を必要なものとする。異形者に対し、普通者は矛盾する。

異形者を無くしたい普通者は、つぎの二通りのことを企てそして行動する：

- a. 業態を普通者が就く形に改め、異形者を外す
- b. 生業そのものを無くす

これは、異形者の側からすると、「ご都合主義」ということになる。

### 4.2.4 例：ヤクザ潰滅キャンペーン

〈生きる〉は、反社会的な部分をもつ。

これを押し込めるところが要る。

こうしてつくられてくるのが、裏社会・闇社会である。

ひとは、表と裏、〈お天道様の下〉と〈闇〉、を使い分ける。

裏/闇社会は、これの管理役が要る。

ヤクザは、この役に就いてきた者である

一方、ヤクザは、〈お天道様の下〉の仕事も担当してきた。

その仕事は、一般人の就けない・就きたくない仕事である。

そのうえで、ヤクザは犯罪集団である。

ヤクザの生業のうちに、一般人を対象とする犯罪がある。

こうして、ヤクザは「両刃の剣」の極まれる存在である。

このヤクザに対し、社会は「潰滅」の路線をとることになった。

国は「暴対法」「組織犯罪処罰法」を立て、地方公共団体は「暴力団排除条例」を立てる。

ヤクザが担当していた〈一般人の就けない・就きたくない仕事〉は、業態を変更することで、〈一般人の就ける・就きたい仕事〉に変え得る。

しかし、裏/闇社会管理役は、だれかが就かねばならない。

そして、ヤクザ犯罪も、同じことをヤクザに代わってやる者が現れてく

るだけのことである。

実際これは、生態学だどつぎの二つのモデルの適用となる主題である：

- a. 「下克上」(新興ギャング)
- b. 「外来種が、在来種に取って代わる」(外国人マフィア)

こうして、「ヤクザ潰滅」は、ヤクザ犯罪問題の解決とはならない。  
これは、ヤクザ犯罪問題の複雑化である。

## 4.3 商品経済体制の共同主義

### 4.3.0 要旨

### 4.3.1 栄達主義

### 4.3.2 安心主義

### 4.3.3 世直し主義

### 4.3.4 栄達主義と世直し主義の弁証法

### 4.3.0 要旨

いまの国の体制は、商品経済の体制である。

ひとは、商品経済体制に取り込まれる<sup>てい</sup>体で生きる。

商品経済体制に組み込まれないという生き方はできない。

そこでひとは、自分を<商品経済体制下で生きる>に向かわせる幻想を醸成する。

それは、商品経済主義である。

### 4.3.1 栄達主義

商品経済は、「栄達」を<生きる>の意味にする。

商品経済は、「栄達」が共同主義の内容になる体制である。

国の政治・経済は、「栄達」を実現するシステムである。

このシステムは、「公平化」(「出自に依らない」)が進化の方向になっている。

「自由平等」「デモクラシー」「グローバリズム」となっていくわけである。

「栄達」は、「消費」とイコールになる。

「より多く消費」が、「栄達」の意味になる。



### 4.3.2 安心主義

<生きる>に「栄達」の意味をつけると、<生きる>は栄達の成否になる。  
そして、栄達の成否が「幸・不幸」になる。  
こうして、<生きる>は、幸・不幸になる。  
<栄達>幻想に生きるとは、<生きる>が<幸・不幸を生きる>になる  
ことである。

不幸の放任は、体制を壊す。  
そこで政治は、ひとの幸せの実現が務めになる。  
商品経済の政治は、自由主義に立つから、多様な個の幸せの共通項とし  
て「安心」を立てるにとどめる。  
また、「安心」を不幸の寛恕とする。  
こうして、「安心」の実現が、政治の務めになる。

「安心」の政治として、物事に細かく合格規準が定められていく。

この結果は、ひとが「安心」を信じようとする者になることである。  
天井川の堤防下に居を構えるのは、リスクの高い賭けである。  
しかし、ひとは、「堤防」を信じようとする。  
山の谷川筋の麓に居を構えるのは、リスクの高い賭けである。  
しかし、ひとは、「分譲地」を信じようとする。

商品経済は、商品経済のインフラを構築・整備する。

この結果は、ひとがインフラの「安心」を頼み、<生きる>をインフラ

依存にすることである。

「安心」は、幻想に過ぎない。  
幻想に過ぎないことを知らしめるのが、災害である。

自然災害で、電気・水道・ガス、物流交通網が停まる。  
今日ひとは、電気・水道・ガス、物流交通網が停まると生きられない。  
ひとはたちまち難民化する。

自然災害による難民化を、いつの時代にも同じと思ってはならない。  
《自然災害→難民化》は、こうなるような生活形態をつくってしまった  
結果である。  
これは、今日的現象である。

### 4.3.3 世直し主義

人間社会の進化は、現在、商品経済体制に至っている。  
 進化は、自己組織化する系の合理がその都度実現されているプロセスである。  
 したがって、商品経済は合理のはずであり、実際この観点から商品経済を考察すれば、これよりましな体制は無いことがわかる。

「栄達」幻想は、商品経済の合理を表している。  
 実際、この幻想は、安全な幻想である。  
 「安全」とは？

「栄達」幻想を安全と言うとき、対比している危険な幻想は、「善」幻想である。  
 実際、社会でいちばん危ない者は、「善」を立てる者である。  
 この者にとって、現前は穢れた世界である。  
 この者は、〈世直し〉を想う。

この者たちが集団を形成し、勢力をもち、〈世直し〉を実行しようとしたらどうなるか。  
 彼らの想う〈世直し〉は、成るものではない。  
 そこで彼らは、不良分子が〈世直し〉を妨げていると考える。  
 そして、「聖戦」として、大量粛清を開始する。

例：毛沢東中国の「文化大革命」

集団が、勢力をもたない集団であって、しかし過激な集団だったらどう

なるか。  
 彼らの〈世直し〉は、テロ行動になる。

例：オーム真理教の「地下鉄サリン事件」

現前の多くの「善」幻想集団は、勢力をもたず、そして順法の集団である。  
 しかし、「聖戦」は「目的のためには手段は選ばず」であるから、実質テロ行為と変わらない卑怯な手を使ってくる。

例：民族派「アイヌ」による言葉・思想狩り  
 →『アイヌ学者の終焉』

「善」「世直し（善の実現）」は、科学の素養があれば立てられないものである。  
 翻って、「善」を立て「世直し」を立てる者は、科学の素養の無い者である。

「世直し」を立てる者は、系がネットワークであることを知らない。  
 ネットワークは、一点を操作しようとする全体に影響が及ぶ。  
 感染症媒体の蚊を撲滅する技術として「遺伝子ドライブ」がある。  
 生物学界は、この技術の使用を禁じている。  
 ネットワークとしての「生態系」の考えを持っているからである。  
 「世直し」を立てる者には、この考えが無い。  
 ネットワークの考えが無いから、「世直し」を立てる。

もっとも、「世直し」を立てる者は、そもそも《何をどうするか》を考えているわけではない。  
 彼らの考えはいたって幼稚である。

彼らは、「世界が穢れているのは、皆が自分のようではないからだ」という考え方をする。

彼らの世直しは、「皆を自分のようにする」である。

即ち、「意識改造」「人間革命」が、彼らの思う世直しである。

よって、《世界のことに無知でも世直しはできる》となるわけである。

彼らの組織は、「教団」の趣きになる。

信者を増やすことが「世直し」ということになるからである。

員は、自分の無知無力を知っているが、「教祖や高弟に従っていけばだいたいじょうぶ」の想いを以て自分を確立・保持する者である。

員は、教団の中で合理精神・批判精神を失う。

これを「洗脳される」と謂う。

重要なことは、このダイナミクスを、どこかよそのカルト教団のもののように思ってはならないということである。

リーダーを頂き「世直し」を探求するグループは、ふつうにどこにもあり、そしてそれは大なり小なりこのダイナミクスに支配される。

#### 4.3.4 栄達主義と世直し主義の弁証法

テロは、無くならない。

<栄達>幻想社会の含蓄だからである。

ひとは、他人の栄達に対し、これを羨み、また嫉む。

この感情の合理化として、栄達競争社会を「穢れ」とする。

こうして、<栄達>幻想は、これに対するカウンターとして多種多様な<世直し>幻想を生む。

そして、その<世直し>が実践されれば、それはテロになる。

また、<世直し>幻想の陣営にとっては、<栄達>幻想はテロである。

テロは、お互い様である。

人間社会を何か上等なもののように考えると、間違う。

人間社会は、高々化学反応系である。

化学反応は、自己励起のしくみがなければ衰滅する。

人間社会は、何を自己励起のしくみにしているのか？

各種対立である。

対立が無ければ衰滅するわけであるから、対立はことさらに絶えず作り出していることになる。

これが、<栄達>幻想に対するところの<世直し>幻想の意義である。

## 5 進歩主義

### 5.1 「進歩主義」

### 5.2 進歩主義の諸契機

## 5.1 「進歩主義」

ヒト種の進化のいまの局面は、「商品経済体制」である。  
人の〈生きる〉は、〈商品経済体制に生きる〉である。

商品経済は、進歩主義のゲームである。  
商品経済体制において、ひとは進歩主義をふるまうことを強いられる。

商品経済は、みな「進歩」を見ているふりをすることで、成る。  
「進歩」を見ているふりをすることが、商品経済に生きる者のマナーである。

「王様は裸だ！」を言ってはならない。  
水を差すような物言いは、厳に慎まねばならない。

例えば、「医療の進歩」。  
平均寿命 100 歳以上を実現する医療の進化を、「進歩」として讃えねばならない。  
その内容が、痴呆性老人の増加、高額医療費の税金負担による国家財政難、等であることを、口に出してはならない。

例えば、「エネルギー革新」。  
海底資源の開拓は、「進歩」として讃えねばならない。  
「資源取り尽くしの果てに、残るは海底か！」のようなことは、言ってはならない。

しかし、商品経済の「進歩」は、螺旋上昇のバベルの塔である。

ひとは、いやでも破局 catastrophe を予感する。  
人々は、「皆で言えば怖くない」（「無礼講」）場面の出現に向けて、待機している。

無礼講は、ひとときのものである。  
原発に対し「廃物処理技術も無いのに運用している」をひとが言うのは、無礼講の場面である。  
ひとは、「電力不足」を言われると、忽ち黙する。  
自分も「廃物処理技術も無いのに運用している」のうちだからである。

ひとの歩みは、進化の歩みである。  
進化は「進歩」ではない。  
「進歩」と「進化」の違いは、前者が「幸福」の概念とつながっていることである。  
「進歩」は、幸福を得ようとする歩みである。  
「進化」は、「なるようになる」の歩みである。

商品経済の進歩主義は、「幸福」の定義である。

IT 端末産業は、キラーコンテンツを探し求めてきた。  
これは結局、グルメと音楽とゲームに収束した。  
これは、「幸福」の定義である。  
——「幸福とは、おいしいものを食べること、音楽を聴くこと、ゲームをすること」

自動運転を開発する自動車産業は、自動運転のキラーコンテンツを探す。

そのキラーコンテンツは、「幸福」の定義である。

「自動運転により、ひとは車の中で本を読めるようになる。」

——「幸福とは、本を読むこと」

## 5.2 進歩主義の諸契機

5.2.1 テクノロジーの進化

5.2.2 進歩主義知識人：「知行合一」

5.2.3 グローバリズム（欧米スタンダード）

5.2.4 政策：「競争原理の導入」

### 5.2.1 テクノロジーの進化

進歩主義は、テクノロジーの進化に支えられる体<sup>てい</sup>で立つ。  
進化が停滞しているところに、進歩主義は現れない。

テクノロジーの進化は、「進歩」とは違う。  
即ち、テクノロジーの進化は、人の「幸福」がどうのとは関係ない。  
テクノロジーの進化は、独自の理による。  
例えば現前のテクノロジーの進化は、「テクノロジーは商売になる」が  
これの理である。

商品は、騙しが半分以上である。  
人は熱しやすいが、そのかわり冷めやすい。  
騙しはすぐに効かなくなる。  
こうして、商売は騙しを開発し続けねばならない。  
これに行き詰まるときが、商売の終わるときである。

テクノロジーの進化のダイナミクスは、これである。  
よって、テクノロジーに支えられる進歩主義は、どこかの段階で、梯子  
を外されることになる。  
進歩主義は、テクノロジーに裏切られるのが定めである。

### 5.2.2 進歩主義知識人：「知行合一」

人は、自分のようではない者に苛立つようにできている。  
そして、自分のような者はいない。

進歩主義知識人は、同業者が自分のようでないことに苛立つ。  
そして、「自分のようでない」を「進歩的でない」に解釈する。

彼は、自分が他とは違うことを示したくなる。  
こうして、自分の進歩的構えのデモンストレーションとなる。  
このとき彼が「進歩的構え」とするものは、「実践に向かう構え」である。  
彼は、「知行合一」を説く者になる。

「知行合一」の「知」の方は、現前ものである。  
彼の作業は、「行」を案出することである。

「行」を案出した彼は、そのアジテーターになる。  
進歩主義知識人は、自分の役割を、「行」の実践者ではなく、「知行合一」  
のアジテーターに最初から定める者だからである。

進歩主義知識人はこのとき、「攪乱」として人の系の運動に与る。  
これが、進歩主義知識人の存在意義である。

「個の多様性」には、進歩主義知識人がつねに一定割合で現れることが  
含蓄されている。  
よって、人の系はつねに攪乱されることになる。

そしてこれは、系が運動の減衰を免れ、死なずに済んでいるということである。

進歩主義知識人がすることは、あくまでも「攪乱」である。

進歩をもたらすことではない。

実際、「進歩」は目指して成ることではない。

「進歩」は、想定していない副産物である。

進歩主義知識人の「攪乱」がひとにもたらすものは、「災難」である。

実際、「災難」だからこそ「攪乱」なのである。

文科省の『学習指導要領』は、およそ十年ごとに改変される。

これは、十年ごとに生徒が被る「災難」の内容が改変されるということである。

——「現代化」「ゆとり」「基礎基本」「グローバル化」……

### 5.2.3 グローバリズム (欧米スタンダード)

現前の公教育は、「人材」を「グローバル化時代への適応者」に定める。

公教育は、進歩主義に立つ。

今日の進歩主義は、グローバリズムである。

グローバル化は、「進歩」とは関係ない。

即ち、人の「幸福」がどうのとは関係ない。

グローバル化の理は、「グローバル化に適応しなければ生業えない」「"グローバル化"を題目にすると商売になる」である。

生産業は、「グローバル化に適応しなければ生業えない」を自分の立場にしていく。

教育産業は、「"グローバル化"を題目にすると商売になる」の方である。

グローバリズムは、かつての植民地主義・帝国主義の今日的表現である。中身は、「世界を舞台に覇を競う」である。

「無国籍企業」なる存在が端的に示すように、商品経済は国を超えるのである。

商品経済と国の関係は、「国に商品経済が従う」ではなく、「商品経済に国が従う」である。

日本においては、グローバリズムは欧米主義——「欧米のスタンダードを自分のスタンダーに」——と重なる。

「グローバリズムは欧米のスタンダードであるから、日本もこれをスタンダーにしなければならない」となる。



## 5.2.4 政策：「競争原理の導入」

2018-09-03 読売新聞

**重症患者の冬眠，台風進路変更……**

**夢の技術 開発競争**

**挑戦チームを政府公募へ**

政府は来年度から、日本発の革新的な技術開発を推進するため、複数の研究者らに予算を配分し、同じ開発テーマの成果を競わせる新制度を始める方針を固めた。10～20年後をめどに、高齢化対策や防災など、政府が定めた開発テーマに沿った新技術の実現を目指す。

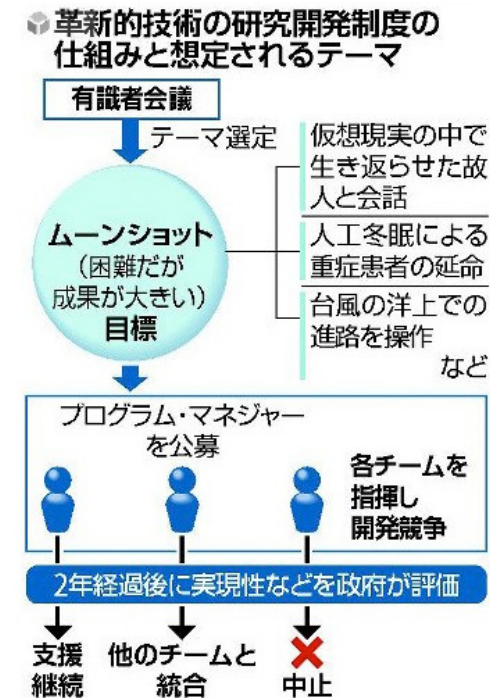
新制度は「ムーンショット型研究開発制度」と命名され、内閣、文部科学、経済産業の3府省合同で実施する。来年度予算の概算要求で内閣、文科両府省が関連予算に約60億円を計上した。今後、経産省分予算が上乗せされ、要求総額は100億円を超える見通しだ。

開発のテーマは「人々の関心をひきつける斬新で野心的な目標」（政府関係者）となる。例えば、〈1〉仮想現実の映像の中で故人を登場させ、本人がいるかのように自然な会話ができる技術〈2〉台風の洋上の進路を操作して日本上陸を回避する技術〈3〉重症患者を冬眠のように1週間程度、人工的に体の活動を休止させ、治療態勢が整うまで延命させる技術——などだ。

制度は、まず各府省からテーマを公募し、新たに設置予定の

有識者会議でテーマを選定するところから始まる。テーマごとに、国の研究機関や大学、企業などに参加を呼びかけ、プログラム・マネジャー（PM）と呼ばれるチームリーダー役の研究者を公募。PMは1テーマにつき2～3人置く。PMは約半年かけて開発計画を策定。開発チームの拠点となる研究機関選定や人材採用などの権限が与えられる。政府が拠出する予算も、計画に基づいてPMと調整して決める。

研究が2年経過した時点で、政府は有識者会議などの助言を受けながら、それまでの実績や独創性、実現性などを評価し、支援を継続するかどうか決める。成果が出なければ、支援中止や他のチームとの併合などの対応が取られる。



政府関係者によると、複数の開発チームに成果を競わせる制度は、米国などでは活用されているが、日本では極めて珍しいという。政府は、3年後の実用化や商品化を目指して、1年ごとに実績などを評価する「短期型」の制度もあわせて導入する方針だ。

米国や中国、欧州連合 (EU) 諸国では、政府主導で革新的な技術開発を推進する制度があり、米国ではインターネットや全地球測位システム (GPS) などの実績がある。

### 米中に遅れ巻き返し

政府が最先端技術の開発で競争原理を導入するのは、研究のスピードアップと、厳しい財政状況の中で効率的な予算配分につなげることが狙いだ。

最先端技術を巡っては、米国や中国が政府主導で、猛烈に研究開発を進めている。米国は脳の神経伝達の仕組みを全て解明してコンピューター開発などに応用する「脳のアポロ計画 (ブレン・イニシアチブ)」を打ち出し、中国も量子暗号技術を使った絶対に盗聴されない通信の実用化を目指す。いずれも実現すれば、社会や産業での競争のあり方を一変させる「ゲーム・チェンジャー」となり得る技術とされる。

日本は最先端技術開発の出遅れ感が否めない。予算の使い道の監視は必要だが、斬新な研究に予算が配分されれば、幅広い研究者の育成にもつながりそうだ。世界を驚かす技術の誕生につながるよう期待したい。

### ムーンショット

「困難だが実現すれば大きな成果が得られる壮大な目標への挑戦」を意味する言葉。本来は、英語で「月へのロケット打ち上げ」を表すが、1961年に米ケネディ大統領(当時)が打ち出した月への有人宇宙飛行計画「アポロ計画」で、人類初の月面着陸を成功させたことにちなんで使われるようになった。

国にとって「テクノロジー」の意味は、国の「競争力」である。国は、「自国発の革新的な技術」の開発推進を政策にする。

「競争力」は、つぎの二つでなる：

- a. グローバル経済における競争力
- b. 武力

自由主義政治の政策は、他力本願である。

笛吹き役回りを己に任じ、笛の音につられてひとが踊り出すことを期す。

曲は、一つしか持ち合わせていない。

「競争原理の導入」である。

かくして「国立大学の法人化」「競争的資金」といったものこれまでにあり、そしてこの度は「ムーンショット型研究開発制度」である。

競争原理の導入は、技術開発推進の方法にはならない。  
ひとは、〈しのぎ〉を考えるようになる。

そしてそもそも「最先端技術を巡っては、米国や中国が政府主導で、猛烈に研究開発を進めている」は、「競争原理の導入」がこれの内容なのではない。

ただし、「競争原理の導入」の言に対し、これの〈馬鹿の一つ覚え〉を嗤うというのは、筋違いである。

実際、この言には、支出削減の意図がある。

国の経済は、収支で見れば破綻している。

研究への予算配分は、削減していかなばならないのである。

また、「夢の技術」の言に対し、これの〈浅知恵〉を嗤うというのも、筋違いである。

実際、研究資金配分の肝心は、これが導く経済効果である。

商品経済が成果に向かうプロセスでないように、商品経済下の技術開発推進は成果に向かうプロセスではない。

求められるものは、「好景気」である。

競争原理の導入で、ひとは〈しのぎ〉にあくせくするようになる。

そしてこれこそが、成果なのである。

実際、これが「好景気」の形である。

競争原理の導入は、技術開発推進の方法にはならない。

しかしそれは、失敗ではない。

競争原理の導入の成果は、《ひとが〈しのぎ〉にあくせくする》という形の「好景気」の実現である。

これに対し無意味を嘆くのは、筋違いである。

商品経済は、無意味である。

〈生きる〉は、無意味である。

元来無意味なものに意味をつけることを、「幻想」という。

その意味が集団の員に共有される意味であるとき、「共同幻想」という。

「競争原理の導入」「夢の技術」は、共同幻想である。

そしてマスメディアは、共同幻想の旗振りが役回りである：

日本は最先端技術開発の出遅れ感が否めない。予算の使い道の監視は必要だが、斬新な研究に予算が配分されれば、幅広い研究者の育成にもつながりそうだ。世界を驚かす技術の誕生につながるよう期待したい。

## 6 保守主義

### 6.1 「保守主義」

### 6.2 保守主義の諸相

## 6.1 「保守主義」

共同体は、生じ滅する。

共同体の〈壊れる〉には、外からの破壊と、自壊がある。

共同体の自壊の内容は、員の共同体離れである。

翻って、共同体があるとは、つぎの二つが成り立っているということである：

1. 員を共同体に引き留める装置が働いている
2. 員においては、共同体離脱の見通しを持ってない

共同体に引き留める装置は、しがらみと寄り合いと祭りである。

寄り合いは、懐柔が機能である。

共同体の中で員の対立が発生したとき、白黒を立てると黒にされた者の立つ瀬が無くなる。

そこで、厭きるまで議論する。

そして、「議論も尽きた——このまま続けても同じ」が全体の気分になったところで、決裁担当役に決めさせようとなる。

決裁担当役は、共同体の長とか長老とかである。

そして祭りは、鬱積の発散が機能である。

「リーダーシップ」「スピード感」は、商品経済の概念である。

商品経済以前の地域共同体の寄り合いは、朝から晩まで、日数を限らず、

である。

商品経済下の共同体は、企業共同体である。

商品経済は、企業共同体が地域共同体を駆逐する。

商品経済の拡大という形の「進歩」は、地域共同体の員に共同体離脱の見通しを持てるようにする：

- ・通信の発達で、外の情報が入ってくる
- ・交通の発達で、移動が簡単になる
- ・「都会」に行けば、身一つで生業える（「賃金労働者」）

地域共同体の消滅は、その共同体の文化の消滅である。

商品経済は、商品経済以前の文化を滅ぼす。

これは、反動を呼ぶ。

保守主義である。

実際のところ、保守主義は商品経済に対し無力である。

保守主義は商品経済に抗えない。

いま目にする旧文化は、保守主義のおかげで残っているのではない。

旧文化は、商品価値になることで、そしてその限りで、残り得る。

当然、もとの形では残れない。

商品価値化の裁断・整形・修飾を被る。

## 6.2 保守主義の諸相

### 6.2.1 反科学

### 6.2.2 反商品経済

### 6.2.3 内面主義

### 6.2.4 「保守」の意味の移ろい

## 6.2.1 反科学

意味・価値・目的の保守を自分の使命にする者は、科学が自分の敵になる。科学は、自分たちが保守してきた意味・価値・目的を迷信と定め、自分たちの努力を無に帰してしまうからである。

たとえば教会は、これである。

彼らは、科学から自分を守るために、疑似科学をつくる者になる。

権力の位にあれば、科学を弾圧する者になる。

共産主義、原理主義といったイデオロギー体制は、必ず知識人の粛清に進む。

知識は、イデオロギーの虚偽を暴くからである。

## 6.2.2 反商品経済

商品経済は、商売になるものが価値になる。

商売にならないものは、価値にならない——捨てられる。

商品経済の価値は、敷衍するとおかしいことになる。

例えば、「長生き」。

「長生き」は、商売になる。

そこで、「長生き」は価値になる。

しかし「長生き」も、「延命」の様相になってくると、「たいがいにせえよ」になってくる。

保守主義の側からは、つぎのような独特な論を編み出す者も出てくる。

西部邁 (2000), pp.68-70.

### 生命至上主義がニヒリズムを蔓延させる

生命至上主義は近現代における最大の不道徳といってよい。なぜなら、人間が生き延びることを第一義としてしまうと、法律に違反しなければ、いや違反しても発覚しなければ、延命のためには何をやってもいいという虚無主義が蔓延するからである。生命至上主義は、人命という手段価値にすぎないものを至高の高みに登らせることによって、目的についての一切の価値判断を放棄させる。その意味で、人命はニヒリズムの苗床なのだ。

そうした生命をめぐって自分の内部から起こってくる不道徳の根を断つには、自分の生命を自分で抹殺してしまうこともありうべし、と構えるほかない。どういう徳義を守るためにどう死ぬべきか、そのことを価値観の最高峰におけば、自分の生命から不道徳が生まれるという人間の最大の弱点を、あらかじめ封殺することができる。

意図的自死について考え語ることが一般民衆の習わしになるということは、おそらく、ありえないであろう。しかし、少なくとも知識人にとっては、イデオロギー（観念の体系）について語るのが彼らの仕事であるからには、虚無主義によって自分の精神が食い荒らされるのを防ぐべく、自死について考究しなければならない。というのも、みずからの語る観念の体系が人命の前では発言力を持たぬと承認するのでは、知識人は単なる臆病者として単なる卑怯の代弁者にすぎなくなるからだ。近代知識人がそういう価値からの逃亡を企てつづけてすでに久しい。そうした逃亡者になりたくないのなら、価値について語るものはすべて、死生観について一貫せる思想を組み立てざるをえない。死の不安・恐怖のうちで最大のものは、それまでの自分の生が無意味であったと思うニヒリズムにほかならないのである。

もちろん、誰も死んだ体験がないからには、死については語りえぬものが多々ありはする。しかし、そこで死について沈黙したままでいると、ニヒリズムに足をすくわれる。語りがたいことをあえて語ってみせるためには、自死の思想を探求しなければならない。死ぬ気にならなければ、死に向かって生きる

気力が湧いてこない。

そして自死について語っているうち、語りは何ほどかはつねにパブリックなものであるから、その言葉のパブリックな連関のなかに自分の生=死がおかれることになる。つまり、自分の言葉に公的な責任を持たなければならなくなり、そこでようやく人間に死ぬ勇気が備わることになる。つまり価値についての公的な発言は、それへの有力な反証が挙げられないかぎり、みずからその実行を引き受けることを要請する。そうなのだと予定したときにはじめて、自分の生=死にインテグリティ（過不足のない筋道）が伴うことになり、それが死に甲斐および生き甲斐の根拠となるのである。

ちなみに、この論の「ニヒリズム」の語の用い方は、当たっていない。

#### 引用文献

西部邁 (2000) : 「死生観が道徳を鍛える」

西部邁 [著], 富岡幸一郎 [編著] 『自死について』, アーツアンドクラフツ, 2018. pp.48-70.

初出:西部邁『国民の道徳』「31 死生観が道徳を鍛える」, 扶桑社, 2000.

### 6.2.3 内面主義

保守主義は、世の流れに抗おうとするが、無力である。

自分の立つ瀬を失うばかりとなる。

現実の中で自分の立つ瀬を失う者は、幻想の中に瀬を築く。

「外面では劣者だが内面においては優者だ」の幻想で、自分を守ろうとする。

このとき、保守主義とは自分の保守のことである。



#### 6.2.4 「保守」の意味の移ろい

「保守」の内容は、時代とともに変わる。

ロジックだと、「かつての革新が、いまや保守」が想われる。  
しかし、「かつての保守が、そのまんまで、いまや革新」もある。

例えば、いまの日本の政党模倣。

政党に対する「保守・革新」のラベリングは、当たっていない。

商品経済体制では、商品経済の飽くなき推進が「革新」であり、これに抑制をかけようとするのが「保守」である。

保守を唱えている党が実は「革新」で、革新を唱えている党が「保守」。

捻れたこのラベリングは、社会主義が新しい体制と目された時代——

その時は、社会主義が「革新」、資本主義（商品経済主義）が「保守」——のなごりである。

## 7 民族主義

7.1 「民族主義」

7.2 「昔々わが民族は……」の創作

7.3 エスノセントリズム

7.4 「日本人」括りの虚妄

7.5 人類学者の不能

## 7.1 「民族主義」

文化A圏の中に文化Bが入ってくる。

「入ってくる」は、「物と人が入ってくる」である。

Bは、経済性（生活効率・生産性）においてAに優っていた。

そこで、Aを捨てBに転じる者が続出する。

A者とB者は、生活圏で争うことになる。

B者はA者の生活場所を侵そうとする。

A者は自分の生活場所を守ろうとする。

ここでBは、武力においてもAに優っていた。

このため、B圏はA圏を駆逐していくことになる。

現象的には、《A圏とB圏の境界線が、これまでA圏であったところに食い込んでいく》である。

境界の移動は、《A者がBに転向する》と《A者がB者から逃げる》の両方である。

B圏の為政者は、A者に対する自分の優越を誇って、B圏駆逐の戦いを「蝦夷征伐」と称する。

「蝦夷」とは、蔑視する異文化民に対する蔑称である。

B圏の学者は、「B民族」の概念を立てる。

「歴史的経緯」「進化」という考え——要するに、「時間」の考え——をまだ持てないためである。

実際、「時間」を考えずに「B民族」を言い出したら、AからBにいま転向した者は「B民族」である。

その学者については、「彼からn代溯った祖先からB民族」の言い方をすることになる。

この学者を嗤うことはできない。

歴史学・進化論が学校で教えられているはずのこの時代にも、「わが民族」を唱えたり「日本人論」を立てたりする者は、後を絶たない。

事程左様に、ひとは「時間」を考えることを不得手としている。

## 7.2 「昔々わが民族は……」の創作

「〇〇民族」は、虚妄である。

「民族」は、創作される。

「民族」は、

「昔々わが民族は、幸福であった」

「昔々わが民族は、まっとうであった」

のストーリーが創作されるとき「わが民族」である。

そしてこのストーリーの内容は：

「わが民族は、いま不幸・混乱の状態にある」

「あの悪者が、わが民族をこの状態にした」

例．つぎの二つは、「アイヌ民族」の創作：

知里幸恵『アイヌ神謡集』「序」

その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、真に自然の寵児、なんと幸福な人だちであったでしょう。

冬の陸には林野をおおう深雪を蹴って、天地を凍らす寒気を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鷗の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べてひねもす魚を釣り、花咲く春は軟らかな陽の光を浴びて、永久に囁ささずる小鳥と共に歌い暮して露ふきとり蓬よもぎ摘み、紅葉の秋は野分に穂

揃うすすきをわけて、宵まで鮭とる篝も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、朧まどかな月に夢を結ぶ、嗚呼なんという楽しい生活でしょう。……

戸塚美波子「詩 血となみだの大地」

自然は  
人間自らの手によって  
破壊されてきた  
われらアイヌ民族は  
何によって破壊されたのだ  
この広大な北海道の大地に  
君臨していたアイヌ  
自由に生きていたアイヌ  
魚を取り 熊 鹿を追い  
山菜を採り  
海辺に 川辺に  
山に 彼らは生きていた  
  
人と人が 殺し合うこともなく  
大自然に添って 自然のままに  
生きていたアイヌ  
この大地は まさしく  
彼ら アイヌの物であった  
侵略されるまでは――  
  
ある日 突然

見知らぬ人間が  
 彼らの 目の前に現われた  
 人を疑わねアイヌは  
 彼ら和人を もてなし  
 道先案内人となった

しかし——  
 和人は 部落の若い女たちを  
 かたっぱしから連れ去ったうえ  
 凌辱したのだ——

そして 男たちを  
 漁場へと連れて行き  
 休むひまなく  
 働かせた

若い女たちは  
 恋人とも 引き離され  
 和人の子を身籠ると  
 腹を蹴られ流産させられた  
 そして 多くの女たちは  
 血にまみれて 息絶えた

男たちは  
 妻 子 恋人とも  
 速く離れ  
 重労働で疲れ果てた体を

病いに胃され  
 故郷に 送り返された  
 その道すから  
 妻を 子を 恋人の名を  
 呼びつつ  
 死出の旅へと発った  
 ……

→ 『"アイヌ民族" 否定論作法』

例. つぎは、「大和民族」の創作：

本居宣長『玉くしげ』

其時代には、臣下たちも下萬民も、一同に心直く正しかりしかば、皆天皇の御心を心として、たゞひたすらに朝廷を恐れつゝしみ、上の御掟のまゝに従ひ守りて、少しも面々のかしこだての料簡をば立ざりし故に、上と下とよく和合して、天下はめでたく治まりしなり、

然るに西戎の道をまじへ用ひらるゝ時代に至ては、おのづからその理窟だての風俗のうつりて、人々おのが私シのかしこだての料簡いでくるまゝに、下も上の御心を心とせぬやうになりて、萬ヅ事むつかしく、次第に治めにくゝなりて、後にはつひに、かの西戎の悪風俗にも、さのみかはらぬやうになれるなり、

註：「悪者」はこの場合「西戎の道」に傾倒した者だが、ただし直接「悪者」にはならず、つぎのようになる：

「抑かやうに、西の方の外國より、さまざまの事さまざまの物の渡り入來て、それを取用ふるも、みな善惡の神の御はからひにて、これ又さやうになり來るべき道理のあることなり」  
(同上)

→ [日本列島人の経緯](#)

---

#### 引用文献

- ・ 知里幸恵 『アイヌ神謡集』  
郷土研究社 ( 炉辺叢書 ), 1923. ( 岩波文庫 1978)
- ・ 戸塚美波子 「詩 血となみだの大地」  
旭川人権擁護委員連合会 『コタンの痕跡』, 1971, pp.95-107.
- ・ 本居宣長 『玉くしげ』

## 7.3 エスノセントリズム

7.3.1 創世神話からエスノセントリズムへ

7.3.2 「国学」の国粹主義

7.3.3 エスノセントリズムの<危険>の構造

### 7.3.1 創世神話からエスノセントリズムへ

共同体は、伝承をもつ。

共同体はより大きな共同体に括られるが、この包含関係で共同体の階層を上げていくと、＜伝承の中に創世神話がある共同体＞に至る。

この共同体レベルで、創世神話をまるままま信じる民族主義が起こったとする。

それは、どのようなものになるか。

創世神話は、神を自分たちに似せて表現する。

よって、わが共同体は「神の国」となる。

そして自分たちは「神から選ばれた民」となる。

——他の共同体は、派生的にできたもの、したがって元来従属的なもの、という位置づけになる。

これが、エスノセントリズムである。

エスノセントリズムは、「わが民族」を「他民族」に対し＜格が違う＞とするタイプの民族主義である。

これは、特別な民族主義である。

どの民族主義もエスノセントリズムであるわけではない。

### 7.3.2 「国学」の国粹主義

本居宣長『玉くしげ』

まことの道は、天地の間にわたりて、何れの國までも、同じくたゞ一すぢなり、然るに此道、ひとり皇國にのみ正しく傳はりて、外國にはみな、上古より既にその傳來を失へり、

それ故に異國には、又別にさまざまの道を説て、おのおの其道を正道のやうに申せども、異國の道は、皆末々の枝道にして、本のまことの正道にはあらず、

たとひこゝかしこと似たる所は有りといへども、その末々の枝道の意をまじへとりては、まことの道にかなひがたし、

いでその一すぢの本のまことの道の趣を、あらあら申さむには、まづ第一に、此世ノ中の惣體の道理を、よく心得おくべし、

其ノ道理とは、此天地も諸神も萬物も、皆ことごとく其本は、高皇産靈神神皇産靈神と申す二神の、産靈のみたまと申す物によりて、成出來たる物にして、世々に人類の生れ出、萬物萬事の成出るも、みな此御靈にあらずといふことなし、

されば神代のはじめに、伊邪那岐伊邪那美二柱大御神の、國土萬物もろもろの神たちを生成し給へるも、其本は皆、かの二神の産靈の御靈によれるものなり、

抑此産靈の神靈と申すは、奇々妙々なる神の御しわざなれば、いかなる道理によりて然るぞなどいふことは、さらに人の智慧を以て、測識べきところにあらず、

然るを外國には、正道の傳へなき故に、此神の産靈の御しわざをえしらずして、天地萬物の道理をも、或は陰陽八卦五行など

いふ理窟を立て、これを説明さむとすれども、これらは皆、人智のおしはかりの妄説にして、誠には左様の道理はあることなし、……

そもそも外国には、かやうに實もなき物をのみ尊みて、天照大御神の御陰の、よに尊く有がたき御事をば、しらずしてあるは、いとあさましき事なるに、皇國は格別の子細あるが故に、神代の正しき古説の、つまびらかに傳はりて、此ノ大御神の御由來をもうかゞひ知て、これを尊み奉るべき道理をしれるは、いと難有き御事にぞ侍る、……

さてかくのごとく本朝は、天照大御神の御本國、その皇統のしるしめず御國にして、萬國の元本大宗たる御國なれば、萬國共に、この御國を尊み戴き臣服して、四海の内みな、此まことの道に依り遵はではかなはぬことわりなるに、今に至るまで外国には、すべて上件の子細どもをしることなく、たゞなほざりに海外の一小嶋とのみ心得、勿論まことの道の此ノ皇國にあることをば夢にもしらず、妄説をのみいひ居るは、又いとあさましき事、これひとへに神代の古傳説なきがゆゑなり、

平田篤胤『古道大意(上)』

御國ばかりで無く。<sup>もろもろ</sup>諸の外国に。人だねの生たるのも。又悪いながらも國らしくなり。夫々に物の出来たるも。皆此神の御靈に因ることで。其證據には。其國國に。各々その傳へが有る。

### 7.3.3 エスノセントリズムの<危険>の構造

民族主義は危ない。

そしてその危うさは、エスノセントリズムにおいて極まる。即ち、危険レベルが「破滅」にまで上がる。

共同体は、「個の多様性」を含蓄する。

「個の多様性」は、制御されねばならない。制御機関を、権力と謂う。

共同体は、外圧を受ける。

権力は、外圧の窓口を務める。

この権力は、「員が一丸となって外圧を撥ね返す」の思いをもつ。そしてこの思いを、員に説こうとする。

エスノセントリズムは、この権力にとって魅惑的なものになる。

「一丸」の形、「一丸」の理屈を、それは与えるからである。即ち、「神の国」「選ばれた民」。

エスノセントリズムは、劇薬である。

しかし、情勢は権力を疲弊させ、疲弊は分別を失わせる。こうして、この権力は、劇薬を飲んでしまう。

エスノセントリストは、少数派である。

これは、「個の多様性」スペクトラム——それは「天の配剤」みたいな



もの——の含蓄である。

エスノセントリズムを飲むことは、以降「個の多様性」（天の配剤）潰しが権力遂行の内容になるということである。

故に、「劇薬」である。

少数派の思想に総員を従わせる方法は、つぎの2通りである：

- a. 弾圧・粛清
- b. 洗脳

もともと、「少数派」にはつぎの含蓄がある：

1. 少数派であることを、自分のアイデンティティにしている。
2. 権力とつながったときは、「思想改造・不良分子の粛清」の先兵になる。

少数派は、権力とつながるときには暴走するようになっている。

そして、ふつうは権力とつながることがないので、穩便に済んでいる。

エスノセントリズムが危ないのは、権力とつながるような状況が可能性として考えられ、そしてそのときの権力は、弱って分別を失った状態ということになるからである。

エスノセントリストは、よい。

他の者は、たまったものではない。

## 7.4 「日本人」括りの虚妄

### 7.4.0 要旨

### 7.4.1 文化の進化

### 7.4.2 境界文化「アイヌ」

### 7.4.3 漂泊民文化「サンカ」

### 7.4.4 難民・窮民文化

### 7.4.5 カウンターカルチャー

### 7.4.0 要旨

立国すると、民族紛争が起こる。

立国は、一つの民族が支配民族になることだからである。

はじまりは、＜複数の文化の混淆＞である。

ここに立国が起こると、立国に伴う利害関係の発生で、異なる文化の間で衝突が起こる。

各文化は、「民族」に己を表現する。

こうして、衝突は「民族紛争」を様相にする。

このように「民族」は幻想である。

翻って、この幻想を幻想と思わないのが、民族主義である。

日本は、一つ民族の国ではない。

一つの民族の国に見えるのは、大きな衝突のステージが既に終わっているからである。

一方、大きな衝突がもう無いことは、一様ということではない。

日本は、これまでもそしてこれからも、ずっと＜複数の文化の混淆＞である。

一般に、系は、＜多様化かつ一様化＞のダイナミクスを以て自己組織化する系である。

系の自己組織化は、系の進化である。

ここで「進化」は「不可逆的」を含意する。

日本は、このような系である。

「日本人」の意味は、「法制的に日本人」である。

しかし日本人でいると、「日本人」を「資質的に日本人」で想うようになる。

即ち、つぎのように想う：

《「日本人」は規準 criteria を以て括られることができ、  
そしてその規準は「日本人の資質」である》

この体<sup>てい</sup>は、民族主義である。

この民族主義が「エスノセントリズム」レベルに高まったのが、「国学」である。

逆に、現前の「日本人論」のいろいろは、このスペクトラムで見なければよい。

「日本人」括りは、民族主義であり、虚妄である。

虚妄であることは、日本文化の内容を＜複数の文化の混淆＞として示すことがこれの直接証明になる。

そこで本章において、「複数の文化」の切り口を示すとする。

### 7.4.1 文化の進化

狩猟採集文化（「縄文文化」）圏の中に米作文化（「弥生文化」）が入ってくる。

「入ってくる」は、「物と人が入ってくる」である。

米作は、経済性において狩猟採集に優る。

そこで、狩猟採集を捨て米作に転じる者が続出する。

米作者と狩猟採集者は、生活圏で争うことになる。

米作者は田の開墾で、狩猟採集者の生活場所を侵すことになる。

狩猟採集者は自分の生活場所を守ろうとする。

米作文化は青銅器・鉄器文化であり、狩猟採集文化は石器・木器である。

そして狩猟採集生活者は、なわばりを広く持つ必要から、離散している。

争えば、米作文化側が勝つ。

こうして、米作文化圏が狩猟採集文化圏を駆逐していくことになる。

現象的には、《狩猟採集文化圏と米作文化圏の境界線が、これまで狩猟採集文化圏であったところに食い込んでいく》である。

境界の移動は、《狩猟採集者が米作に転向する》と《狩猟採集者が米作者から逃げる》の両方である。

米作文化圏の為政者は、狩猟採集者に対する自分の優越を誇って、狩猟採集文化圏駆逐の戦いを「蝦夷征伐」と称する。

米作文化圏の学者は、「大和民族」の概念を立てる。

「歴史的経緯」「進化」という考え——要するに、「時間」の考え——をまだ持てないためである。

実際、「時間」を考えずに「大和民族」を言い出したら、狩猟採集から米作にいま転向した者は「大和民族」である。

その学者については、「彼からn代溯った祖先から大和民族」の言い方をすることになる。

この学者を嗤うことはできない。

歴史学・進化論が学校で教えられているはずのこの時代にも、「日本人論」を立てる者は後を絶たない。

事程左様に、ひとは「時間」を考えることを不得手としている。

## 7.4.2 境界文化「アイヌ」

人間の歴史は、文化の生存競争がこれの内容である。

競争する文化は、文化圏の対立として現象する。

そして、対立の均衡相——その時々<sup>の</sup>均衡相——として、文化境界を現す。

文化境界は、線ではない。

「境界文化」とでも呼べるような、ゾーンになる。

境界文化は、対立する文化の混淆である。

この文化圏の者は、対立する文化のインタフェースを演じるふうになる。

日本の歴史では、「アイヌ文化」という境界文化がかつて存在した。

これは、耕作を生業として定住生活する文化と狩猟採集を生業として移動生活する文化の境界文化である。

耕作定住生活者と狩猟採集移動生活者は、生活の場所取りで衝突する。

そして、前者がこの場所取りに勝っていく。

「場所取り」の内容は、つぎの2つである：

- a. 狩猟採集生活者の生活圏に耕作生活者が入ってきて、狩猟採集生活者が追い出される
- b. 狩猟採集生活者が耕作定住生活に転向する

追い出された狩猟採集生活者は、山地や北方に移ってそこを生活の場所にする。

しかし、耕作定住生活文化圏の拡大は止まらない。

耕作定住生活文化圏と狩猟採集生活文化圏の境界線が、さらに山の中へ・北の方へ移動する。

この過程で、境界ゾーンに、耕作定住生活文化と狩猟採集生活文化が混淆した文化が醸成される。

境界線北方移動での境界文化は、「アイヌ文化」である。

境界線山地移動での境界文化の方は、不明である——いまは痕跡をたどる術も無い。

北方の狩猟採集生活者を、耕作定住生活文化圏は「蝦夷」と括る。

自分は、「大和<sup>やまと</sup>」である。

大和圏の拡大は、ときに武力でなされる——「蝦夷征伐」。

大和と蝦夷の境界線は、北方へ移動し続ける。

そしてついに津軽海峡を渡り北海道に入る。

この段階での境界文化、それが「アイヌ文化」である。

→ [アイヌ学：「アイヌ」とは](#)

「アイヌ」とは、「アイヌ文化の者」のことである。

「アイヌ」という DNA タイプがあるわけではない。

実際、和人がアイヌになるということもある：

山本多助 (1948), p.32.

わが一族の古老たちによると、われらの先祖は青森から船出し

て網走に上陸、その後クシリ（釧路）に定住したのだという。  
私としては、はなはだ気に入わぬことではあるが、いたしかたのない事実である。

アイヌは、漁獵採集と小規模畑作を営む。  
土地に縛られておらず、状況次第で居住場所を移動する。  
——この意味で、定住生活者ではない。

生活用具には、和人から得る物が多く混じる。  
——矢・槍・鍋・針等の鉄器、綿布・糸、装飾品・宝物、酒・煙草。  
アイヌ文化が境界文化と位置づけられる所以である。

この境界文化の形成には、蝦夷統治に当たった大名たちのアイヌ政策が与っている：

1. 部族長アイヌを懐柔・分断・討伐。
2. 部族長が無くなったアイヌを、和人から隔離するように統治

境界文化の存在は、「日本人」括りの虚妄を直接示すものになる。  
「日本人」括りは、全部をとれないからである。

#### 引用文献

山本多助 (1948) : 「釧路アイヌの系図と伝説」  
収載：チカッブ美恵子編著『森と大地の言い伝え』, pp.21-84

### 7.4.3 漂泊民文化「サンカ」

ひとは、「生活者」を「定住生活者」の相でイメージする。  
「非定住生活者」を捨象する。

定住生活者に対し、非定住生活者がある。  
定住生活者が法制的存在であるのに対し、非定住生活者は法制的埒外になる。

「埒外」とは、「無籍」ということである。

非定住生活は、自給自足生活とそうでないのに分かれる。  
このときの自給自足生活は、漁獵採集生活ということになる。  
しかしこれは、土地を「国土」として統制する体制ができると、不可能なものになる。  
よって、松前藩がアイヌ隔離政策を以て統治した北海道を除いて、非定住生活者は定住生活圏と交わって生きる者になる。

この生活は、近年ものとしては、つぎの形態が挙がる：

- a. 定住生活者から施しを受ける
- b. 川漁を営み、獲物の余剰を定住生活者に売る
- c. 職能者として、定住生活者から仕事の対価を得る

但し a, b は、広義には c に包含されることになる。  
そしてこの c が、「サンカ」の総称で民俗学 / 歴史学の主題になる。

→ [サンカ](#)

職能系サンカ概念が立つのは、その職能が彼らならではのもの——他の者には真似できない特技——であることによる。

職能は、細工と芸能がある。

細工は、箕・箒み おき作りに代表される——細工系サンカ。

現前の民俗学に「芸能系サンカ」の概念は無い。

しかし、「クグツ」<sup>(註)</sup>との系譜的連なりを「サンカ」に見ようとするのが現前の民俗学である上は、(「芸能系クグツの近代型」の意味であれ)「芸能系サンカ」が措かれてしかるべきである。

註・大江匡房『傀儡子記』

傀儡子者、無定居、無當家、  
穹廬氈帳、逐水草以移徙、  
頗類北狄之俗。

男則皆使弓馬、以狩獵為事。  
或跳雙劍弄七丸、  
或舞木人、鬪桃梗、  
能生人之態、殆近魚龍曼蜺之戲。  
變沙石為金錢、化草木為鳥獸、能誑人目。

女則為愁眉、啼粧、折腰步、齟齬咲、施朱傅粉、倡歌淫樂、以求妖媚。  
父母夫聳不誠告、  
亟雖逢行人旅客、不賺一宵之佳會。  
微篋之餘、自獻千金繡服錦衣、金釵鈿匣之具、莫不異有之。

不耕一畝田、不採一枝桑、  
故不屬縣官、皆非土民。自限浪人、  
上不知王公、  
傍不怕牧宰。  
以無課役、為一生之樂。  
夜則祭百神、鼓舞喧嘩、以祈福助。

東國美濃、參川、遠江等黨、為豪貴。  
山陽播州、山陰馬州等黨次之。  
西海黨為下。

其名儼、則小三、日百、三千載、萬歲、小君、孫君等也。  
動韓娥之塵、餘音繞梁、  
聞者霑纓、不能自休。  
今様、古川様、足柄、片下、催馬樂、黒鳥子、田歌、神歌、棹歌、  
辻歌、満固、風俗、咒師、別法等之類、不可勝計。  
今即是天下之一物也、  
今誰不哀憐者哉。

現代語訳 (筒井功 (2012), pp.159,160)

傀儡子には定まった居地も、ちゃんとした家もない。  
天幕きゅうろせんちよう(穹廬氈帳)で暮らしながら、水草おを逐うような移動生活をしている。  
それは中国北方の異民族の習俗に、すこぶる似ている。  
男はみな弓馬を使い、狩獵をもって生業としている。  
あるいは(お手玉のように)二本の剣を空中に投げ上げては受

け、七つの球を同時に操って同じことをする。

あるいは木製の人形を舞わし、桃の木で作った人形を闘わせて、さながら生きた人間のような動きをさせる。

それは作り物の魚龍が本物のように体をくねらせる（中国の）幻戯を思わせる。

ほかにも沙（砂）石を変じて金銭にしたり、草木を化して鳥獣とする手品を演じて、よく人の目をくらませる。

一方、女の方は愁眉・啼粧・折腰歩・齧齒咲（以上は要するに化粧の仕方や、愛敬・嬌態の動作）し、また紅や白粉をぬり、みだれた歌やみだらな音楽で、なまめき媚びる。

両親も女の夫も、これをいましめない。

しばしば道行く人、旅の者に会っても一夜のちぎりをいとわない。

（客は）彼女らを呼んで自ら千金の繡服・錦衣（上等の衣服）や金釵・鈿匣（金のかんざしと青貝細工のこぼこ）を与えるので、みなそのようなものを持っている。

一畝の田も耕さず、一枝の桑も採らない。

だから朝廷には隷属せず、みな農民ではない。

自ら戸籍を離れた流浪の民である。

上は王公を知らず、また地方長官を怕れない。

課役がないことをもって一生の楽しみとしている。

夜は百神を祭り、これを鼓舞し、はやしたてて福助を祈る。

東国の美濃・三河・遠江などの党は豪貴であり、山陽の播州、山陰の馬州（但馬）などの党がこれに次ぎ、西海の党は下であ

る。

名儼（有名な傀儡子）として小三・日百・三千載・万歳・小君・孫君などがいる。（その歌は）韓娥（古代中国の名歌手）のように、「塵を動かして余音は梁をめぐる」（歌の上手なことを意味する）。

聞く者は冠の紐をぬらして、涙をとめることができない。

今様・古川様・足柄・片下・催馬楽・黒鳥子・田歌・神歌・棹歌・辻歌・満固・風俗・呪師・別法など、たくさんの種類がある。

そのすばらしいことは天下の一物（すぐれたもの）であり、だれが哀憐せずにいられようか。

#### 引用・参考文献

- ・大江匡房『傀儡子記』, 1087.
- ・筒井功 (2012): 『サンカの起源』, 河出書房新社, 2012.

#### 7.4.4 難民・窮民文化

「日本人」括りの虚妄を直接示すものとして、境界文化の存在を挙げた。さらに「日本文化」括りになると、この括りの虚妄を示すものに、難民・窮民文化も加わってくる。

難民・窮民は、つねに発生する。

生きることは、生存競争だからである。

競争に負けた者、競争からドロップアウトした者は、難民・窮民になる。

難民・窮民は、生存競争に残った者とは違う場所に住み、違う生業を編み出す。

そこで自ずと独特な文化を現すことになる。

「難民・窮民」は、その特徴的タイプが時代によって変わってくる。

即ち、「古代」では、耕作定住生活圏の拡大によって生活の場を失う狩猟採集生活者が、特徴的なタイプになる。

そして、「中世」は世の動乱からの難民、「近世」は飢餓窮民・非差別難民、「現代」は「ホームレス」(参考:[坂口恭平 2008])といったぐあいである。

[宮本常一 1960], pp.160-163 (岩波文庫ワイド版)

その原始林の中で、私は一人の老婆に逢いました。たしかに女だったのです。しかし一見してはそれが男か女かわかりませんでした。顔はまるでコブコブになっており、髪はあるかないか、手には指らしいものがないのです。ぼろぼろとっていいような着物を着、肩から腋に風呂敷包を襷にかけておりました。大

変なレブラ患者なのです。

……

老婆の話では、自分のような業病の者が四国には多くて、そういう者のみの通る山道があるとのことでした。

……

私の逢うた当時九十四になる老人の話では山を見まわってあるいていて、……思いもそめぬ所に道のあることを発見すると申します。全く村人の気付かない往還(道)のあるものだとしておりました。そして「盗人の通る道もあるのだからカッタイ病の通る道もあるでしょう」と話していました。

#### 引用・参考文献

- ・宮本常一(1960):『忘れられた日本人』, 未来社, 1960.  
(岩波文庫, 1984, ワイド版 1995)
- ・坂口恭平(2008):『TOKYO 0円ハウス 0円生活』大和書房, 2008.  
(河出書房新社(河出文庫), 2011)



### 7.4.5 カウンターカルチャー

「日本人」の括りを考える者は、現前に「日本の心の喪失」を見る者である。この者は「日本の心の復興」を想う。復興の方法は、教育であり、その教育を実現する政治である。翻って、「日本人」の括りを考える者は、教育家・政治家体質の者である。

<かくあるべし>へ人を導きたく思う者がいる一方で、<かくあるべし>から外れようとする者がいる。これは「天の配剤」というものである。——ちなみに「個の多様性」の主張は、「天の配剤」の主張である。

世の中は、<統制>と<逸脱>のその時々均衡相である。統制側の教育家・政治家に対し、逸脱側は非行者である。均衡は、両者の対立の均衡である。

非行者の文化を、「カウンターカルチャー」と謂う。カウンターカルチャーの者は、教育家・政治家からの<かくあるべし>の括りに対しては「自分をその中に括ってくれるな」を返す者である。

### 7.5 人類学者の不能

民族主義は、科学によって却けられるものである。しかし困ったことに、今日、文化人類学者は民族主義の側についている。

つぎが、文化人類学者の民族主義宣言である：

『アイヌ研究に関する日本民族学会研究倫理委員会の見解』  
『民俗学研究』（日本民族学会）、54(1)、1989。

少数民族の調査研究に際して民族学者、文化人類学者が直面する倫理的諸問題を検討するため、日本民族学会理事会は1988年11月、研究倫理委員会を発足させたが、この委員会は数度にわたる慎重な審議をふまえて、このほどまずアイヌ研究についての見解を次のようにまとめた。

1. 民族学、文化人類学の分野における、基本的な概念のひとつは「民族」である。この「民族」の規定にあたっては、言語、習俗、慣習その他の文化的伝統に加えて、人びとの主体的な帰属意識の存在が重要な要件であり、この意識が人びとの間に存在するとき、この人びとは独立した民族とみなされる。アイヌの人びとの場合も、主体的な帰属意識がある限りにおいて、独自の民族として認識されなければならない。

アイヌ民族がこれまでに形成発展させてきた民族文化も、この観点から十分に尊重されなければならない。また一般的に、民族文化は常に変化するという基本的特質を持つが、特に明治以降大きな変貌を強いられたアイヌ民族文化が、あたかも滅び

ゆく文化であるかのようにしばしば誤解されてきたことは、民族文化への基本認識の誤りにもとづくものであった。

2. 民族学者、文化人類学者によって行われてきたアイヌ民族文化の研究も、その例外ではなかった。これまでの研究はアイヌ民族の意志や希望の反映という点においても、アイヌ民族への研究成果の還元においても、極めて不十分であったと言わねばならない。こうした反省の上に立てば、今後のアイヌ研究の発展のために不可欠なのは、アイヌ民族とその文化に対する正しい理解の確立と、相互の十分な意志疎通を実現し得る研究体制の確立である。そのためには、まずアイヌ民族出身の専門研究者の育成と、その参加による共同研究が必要であり、またこれを実現するための公的研究・教育機関の設立が急務である。

3. こうして得られた研究の成果は、教育・啓蒙の側面においても積極的に活用されるべきである。すなわち、抑圧を強いられてきたアイヌ民族の歴史とその文化について、学校教育、社会教育等を通じて正しい理解をたかめ、日本社会に今なお根深く残るアイヌ民族に対する誤解や偏見を一掃するため、あらゆる努力がはらわれなければならない。この目的のためには、初等・中等教育における教科書の内容についても十分に検討する必要がある。一方、アイヌ民族の若いメンバーや若い世代に対して、アイヌの伝統文化とアイヌ語を学習する機会が制度的に保証されなければならないとわれわれは考える。

4. アイヌ民族に対するこうした正しい理解の促進は、現在

さかんに強調されている国際理解教育の第一歩でもある。独自の文化と独自の帰属意識を持つアイヌ民族が日本のなかに存在することを正しく理解することなしに、国際化時代の異文化理解は到底達成し得ないことを認識する必要がある。アイヌ民族に対する正しい理解を出発点としてこそ、他の少数民族や差別の問題についても公正な認識を持ち、他の文化や社会についての理解を深めることができるのである。

5. 以上の見解は、文化や社会の研究と教育に携わっているわれわれ民族学者、文化人類学者の研究倫理から発したものである。今日、日本のみならず、世界のいずれの地においても、一方的な研究至上主義は通用しない。われわれの研究活動も、ひとつの社会的行為であることを肝に銘ずべきである。今回のアイヌ民族に関するわれわれの見解の表明は、こうした社会的責任の自覚にもとづくものに他ならない。

1989年6月1日(木)

日本民族学会研究倫理委員会

委員長	祖父江孝男	(放送大学)
委員	伊藤 亜人	(東京大学)
	上野 和男	(国立歴史民俗博物館)
	大塚 和義	(国立民族学博物館)
	岡田 宏明	(北海道大学)
	小谷 凱宣	(名古屋大学)
	小西 正捷	(立教大学)
	スチュアート ヘンリ	(目白女子短期大学)

田中真砂子	(お茶の水女子大学)
丸山 孝一	(九州大学)
山下 晋司	(東京大学)

科学は、言えば身も蓋もないようなことを敢えて言うから、科学である。しかし文化人類学者は、「周りに気遣いしてものを言わねばならない」を立場にする。

民族主義者に対しては、よいしょで応じることになる。

しかも、この宣言が民族派からの恫喝に恐れをなしてつくったものであることが、また情けないところである。

つぎがその恫喝：

アイヌ解放同盟(代表 結城庄司), 北方民族研究所(代表 新谷行) 連名  
「第26回 日本人類学会, 日本民族学会連合大会のすべての参加者  
に対する公開質問状」

太田竜「アイヌ共和国独立・夢と展望」(1972) (太田竜『アイヌ革命論』  
に収録, pp.208-225) に「全文引用」とあるのを, 孫引き.

今から十九年前、この札幌で、日本人類、民族学会連合大会が開かれた。その主要テーマの一つは、今年の二六回大会と同じく、アイヌ研究であった。知里、河野広道の論争と、両者の決裂がその焦点であった。和人アイヌ学者全体を憎悪し、闘争し抜いたウタリ知里真志保は、すでにない。

知里の遺志を継承し、発展させることを志して、我々、アイヌ解放同盟、北方民族研究所は、本大会のすべての参加者に対し、次の質問に答えることを要求する。

第一。

本大会の大会委員に名をつらねている高倉新一郎、更科源蔵は、北海道アイヌ専門学会の代表的指導者である。彼等は、くり返し、アイヌ民族はすでに滅亡しており、日本民族の中に同化しきっている、と明言している。

本大会のアイヌ問題についての討議は、アイヌ民族は亡びている。或いは亡ぼすべきである、という原則に立って行なわれるのか。

それとも、原始共産制に生きたアイヌ社会は、アメリカ大陸におけるインディオと同じく、尚生きており、滅びることを相否しており、征服者たる日本国家に対決している、という認識に立って行なわれるのか。

この点を質問する。

第二。

松前藩時代から明治以降、今日に至るまで、和人の側のアイヌ研究、アイヌ専門学界は、アイヌ同族を研究と解剖の客体として位置づけて来たのではなかったか。まず和人の軍隊がアイヌを暴力で征服し、次に、商人資本がアイヌを奴隷的に使役し、更に和人の農漁民がアイヌ同族からすべての土地と海を奪い取り、最後にアイヌ専門学者がアイヌの精神と歴史を抹殺しようとして来たのではなかったか。

本大会のすべての参加者諸君。

君たちは、和人支配者階級の圧迫、征服に対決するアイヌ解放の味方なのか。それとも君たちは、日本国家のアイヌ滅亡、抹殺作業の総仕上げの担い手なのか。君たちは、この問いに

こたえなければならない。

本大会幹事の一人である埴原和郎君（本大会開催場所である札幌医科大学助教授）は、一九七二年八月十七日付夕刊北海道新聞紙上に、次のようなきれいな言葉を書いた。

「……アイヌ系の人々は、とくに和人とのかかわり合いにおいて、多くの苦汁をなめてきたにちがいない。このような面を無視しては、今やアイヌ論はなりたたないとさえいえる。来るべきシンポジウムは、こんな点でもまた、二十年前とはちがったものになるだろう。過去の研究は尊重されるべきであるが、また一面では、これらにとらわれない自由な討議がなくては、科学の進歩は期待できないのである」。

さて、本大会幹事、埴原君。

われわれ、アイヌ解放同盟、北方民族研究所は、君の言う自由な討議、本連合大会のスケジュールにとらわれない真実の討議を欲するのだ。

真実の、自由な討議とは何だ。殺され、自由を奪われ、すべてを抹殺されてきた被征服原住民アイヌの発言を無制限に解放することだ。

いうまでもなく、君たちをはじめとする和人の教育者の大きな力によってアイヌの多くの子弟は、脱アイヌ、和人搾取者階級文明への同化の道に引きずり込まれている。だが若くして死んだアイヌ作家鳩沢佐美夫の、次の主張を聞くがいいのだ。

「……僕はね、一学者の例をあげて、ここで問題にしようとしているのではないんだ。けれども、アイヌ学者、研究者という連中は、どいつもこいつも、純粋な植物に寄り襲ってくる

害虫の一種でしかないと断言したい。……対象が素朴であれば素朴なほど、朽ち枯れる度合も多いんだ。しかもだ、その屍も、彼たちにとっては、恰好の糧なのだ……」

（新人物往来社刊『鳩沢佐美夫遺稿集、若きアイヌの魂』三五頁）。

本大会委員、更科源蔵君。

君にこそ、全アイヌ同胞の憎悪は集中している。

なぜなら、君の前半生はアイヌの良心的味方であり、そして君の後半生は、そのこと〈アイヌの友であること〉を、資本として、和人搾取階級の国家権力のアイヌ精神抹殺者へとオノレを売りわたしたからだ。

われわれアイヌ解放同盟、北方民族研究所は、何はともあれ、更科源蔵をアイヌ同族の敵として糾弾するのだ。

一九七二年八月二十五日

太田竜「アイヌ武装反乱の微かな兆し」, 1973.

（太田竜『アイヌ革命論』収載, pp.226-242.）

（pp.226-229）

私は『話の特集』七二年十一月号（本書前章参照）でシャモのアイヌ専門学者たちに警告しておいた。北方民族研究所宣言は、着実に実行に移される、ということ。

十月四日午後、結城庄司、新谷行及び私の三名は、東京・明治大学大学院でまさに授業を始めようとした祖父江孝男（明大教授、八月二十五日の札幌医大における日本民族学会・日本人類学会第二六回連合大会総合シンポジウムの座長）に対し、その場で、一時間にわたり質問と公開討論を行なった。

その結果、祖父江孝男は、次のようなわび状を書いた。左にこれを公表する。

九月一日付、北海道新聞紙上において八月二五日行なわれた人類学民族学連合大会のシンポジウムのことを書きましたが、その際登壇されたアイヌ解放同盟および北方民族研究所のことについて記し、その場に居合わせた本多勝一氏のことばを引用して「彼等の言うことにも一理はあるが、そのやりかたはいささか小児的」と書きましたが、本多氏はそのあとから「あのことばはむしろ太田竜氏に対して自分が言ったことばであって、解放同盟会体に対して向けられたものでは決してない」と訂正して参りました。また私自身はその時の状況を詳しく知らずに、ただこうした運動全体が小児的であるかの如き印象を一般の人びとに与えてしまったのはまことに申訳なく、ここに訂正し、お詫び致します。

また考えてみますと、あの時のシンポジウムの準備段階においてアイヌ系の人びと、特にウタリ協会などの人びとへは事前によく連絡し、内容を知らせておくなどのことをしておくべきところであり、またあの時、最後にアイヌ系の人びとの発言を許すとの約束があったにも拘わらず、結局その約束が実現されずに終わっていたことも、当日の総合討論（文化部門）の座長として申訳なく、ここにお詫び申しあげます。

明治大学教授

日本民族学会会長  
祖父江孝男

昭和四十七年九月四日

アイヌ解放同盟代表 結城庄司殿  
北方民族研究所代表 新谷 行殿

祖父江孝男の論文（『北海道新聞』九月一日付夕刊「北方圏の人類学と民族学」——シンポジウムを終わって・下）の問題の箇所は次の通りである。

…… また今回の論議のなかには社会構造、親族構造の問題が全くとりあげられていないのも惜しい点だし、文化変容の過程と、アイヌ系の人びとが現在おかれている状態（差別などの問題もふくめて）についての研究も今後の課題として考えるべきであろう。しかし人類学者としての私たちは、この点でたちまち学者のモラルを問う根本的な問題に直面してしまうのである。

人類学者の故泉靖一（東大）教授は『フィールド・ワークの記録』と題する著書（昭四四）の序文のなかで、十勝海岸にカラフトからの引き揚げアイヌを訪ねたときのことに、つぎのように記している。

『丁度（ちょうど）一人の老人について聞き書きを行なっているとき、隣家の中年の女性が血相かえてどなりこんできた。

"おめえたちはカラフト・アイヌがどんな苦勞をしているかしるめえ。おれたちをだしにして博士さまになる気か？……"

私は電光に打たれたより激しく衝撃を受け、ただあやまって調査をせずに帰ってきた。それくらいアイヌ系の人びとにあうことが苦痛だし、調査を試みようもしない』。

実はこのとき泉教授に同行していたのが当時大学院にいた私であり、私も泉教授と同じくアイヌ文化の研究から離れるに至ったのであった。しかしそうかといって、アイヌ伝統文化と民族の歴史を正しく記録し、把握しておくことはまた、人類学者の行なうべき重要な課題なのである。こうした根本的なジレンマの存在に対しては、研究者の多くが痛感しておられるところだと思うが、ひとりひとりがいっそう明確な意識をもって直面すべき課題であろう。

そしてまたこうした問題についての討論は、あくまで冷静に行なわれるべきだと思う。

実はこのシンポジウムの席上、演壇を占拠した青年たちは、このシンポジウム自体がアイヌ民族を亡ぼそうとする政治意図から開かれたと激しく迫ったのだが、どうもこうしたふん囲気が作られてしまうと、議論ははじめからかみ合わなくなる。

かつて黒人やインディアンの差別問題を取りあげ、人類学者のモラルをきびしく批判したあるジャーナリストが当日、聴衆の一人として出席しており、『彼らのいうことにもたしかに一理はある。しかしそのやりかたは、いささか

小兒的』と述べていたのが印象的だった。

文化人類学者の「研究倫理」実践を、最近の出来事から引いておく：

北海道新聞 2018/08/04

### 収集したアイヌ民族の遺骨を供養 北大でイチャルパ

北大医学部がかつて研究目的で収集し、保管しているアイヌ民族の遺骨の慰霊祭「イチャルパ」が3日、札幌市北区の北大構内にある「アイヌ納骨堂」で開かれ、関係者ら約150人が鎮魂の祈りをささげた。

慰霊祭は、北海道アイヌ協会が主催し、今年で35回目。同協会の加藤忠理事長は「責任の所在を明らかにし、禍根を残すことのないよう対話に基づき返還を進めていきたい」とあいさつ。北大の名和豊春学長は「歴史的経緯においてアイヌ民族への配慮を欠いたことを真摯（しんし）に受け止め、教育研究機関として責務を果たしていく」と述べた。

納骨堂には遺骨942体と、一部の骨など一体分として特定できない遺骨を収めた332箱が保管されている。慰霊祭には、**日本人類学会**の篠田謙一会長（国立科学博物館副館長）ら関係団体・機関の代表も参列した。

ちなみに、アイヌに「遺骨（舍利）」の概念は無い。

「遺骨（舍利）」の概念は、仏教のものである。

仏教の遺骨供養が「イチャルパ」だとは、見当違いもはなはだしい。実際、つぎが、アイヌの「死」の観念である：

Batchelor, John (1901) : The Ainu and Their Folk-Lore.  
(引用は、安田一郎 [訳] 『アイヌの伝承と民俗』(青土社, 1995) から)

(pp.450, 451)

霊は、肉体が横たえられた墓とそのすぐまわりに出没すると考えられているし、また霊は、肉体の休息場所の近くで見つかった人にはだれであるかと、その精神に魔法をかけるし、さらにその肉体に危害を加える力をもっているだけでなく、その霊が女の霊ならとくに、機会があり次第そうする意志をもっていると考えられている。

……

他人が埋葬された場所の近くに行かないようにするために物語られる民間伝承はつぎの通りである。

「もし人が墓に行くなら、それがどんなに古いかは、問題ではなく、その人はきっと罰せられるだろう。それゆえ、用心せよ、用心せよ」。

(p.460)

肉体が墓場近くにいるとき、霊も、少なくともその一部はその近くにおいて、だんだんその地上の住まいから解放される。霊は慎重に一人にしてやらねばならない。

さきにほのめかしたように、だれも霊の領域には侵入してはならない。というのは、それは部屋と完全な自由を必要とするからである。

それゆえ、アイヌが共同墓地でなく、森のなかの遠く離れ、隔離された場所に遺体を埋葬する理由は、この考えに求めねばならない。

p.461

彼らは、埋葬するときには、場所を示すために、各墓の足元に棒を必ず立てる。

この棒は便宜上墓標とよばれてよい。

しかしこれは、死者を思い出すよりもむしろ(というのは、それについてはどんな字も書いてないからである)、埋葬がここにあったことを偶然ここに来た猟師に指摘し、過ちを犯さないようにするためである。

## 8 宗教

8.1 信仰パフォーマンス

8.2 科学と宗教のダブルスタンダード



## 8.1 信仰パフォーマンス

無宗教の者も、法事では手を合わせる。

神社仏閣を訪れると、礼拝する。

「天国」を迷信としていながら、「今頃故人は天国で……」のような物言いをする。

共同体の員に求められるパフォーマンスのうちに、信仰パフォーマンスがある。

ひとはこれを、員のマナーとして受け入れる。

最初は受動的にこれを行い、だんだんと能動的に行うようになる。

能動的に行うのは、これを抜くと精神が安定しないからである。

悪いことが起こるような気分になるからである。

こうなるのは、強迫観念になっているからである。

身につけたルーチンは、強迫観念になるのである。

信仰パフォーマンスを強迫観念にした者は、周囲の者にも同じ信仰パフォーマンスを求める。

《それをしない者はバチがあたる；さらに一蓮托生ということで、みんなにバチがあたるかも知れない》の気分になるからである。

こうして、信仰パフォーマンスは、代々受け継がれていくことになる。

この信仰パフォーマンスには、根拠がない。

実体は、幻想である。

そして、共同体の員なら身につけねばならない幻想であるから、共同体幻想である。

## 8.2 科学と宗教のダブルスタンダード

宗教が説く内容は、現実と対立する。

科学は、現実に合理的説明をつけようとする。

よって、宗教が説く内容は、科学が説く内容と対立する。

一方ひとは、己のうちに現実 / 科学と宗教を共存させることができる。

ひとは、喩えていえば、現実 / 科学の引き出しと宗教の引き出しを別々に持っている。

都合に合わせて一方の引き出しを開け、そのときはもう一つの引き出しを閉めたままにする。

こうして、現実 / 科学と宗教のダブルスタンダードが成る。

### III 疎外幻想

9 疎外幻想

10 メルヘン

11 「正道」

13 「現成」

14 「あの世」

15 ニヒリズム

## 9 疎外幻想

### 9.1 「疎外幻想」

## 9.1 「疎外幻想」

人の〈生きる〉は、〈共同体の員として生きる〉である。

〈共同体の員として生きる〉は、〈共同体の員として生きることを強いられる〉である。

この強迫に、人は苦しむことになる。

そして、「自由」「正義」「救い」「定め」等々の幻想をつくり出す。

このタイプの幻想を、本論考では「疎外幻想」と呼ぶことにする。

## 10 メルヘン

### 10.1 メルヘン

### 10.2 例：「アイヌ」

## 10.1 メルヘン

### 10.1.1 カタルシス

### 10.1.2 ノスタルジア

### 10.1.3 「自由 *freedom*」

### 10.1.4 「勝利 *victory*」

## 10.1.1 カタルシス

個人は、共同体幻想に疎外される。

疎外されてひとは、カタルシスを空想によって得る。

このタイプの空想を、「メルヘン」と呼んでおく。

メルヘンは多種多様であり、個の多様性（個性）を表す。

## 10.1.2 ノスタルジア

ひとの生活は、進化する。  
いまは以前と同じではない。

この進化の主要な内容は、テクノロジーである。  
ひとはテクノロジーを絶えず進化させるとい形で、己を進化させている。

テクノロジーは、生活の効率化である。  
効率化を実現しているのは、規格化である。

ひとは、この規格化に疎外される。  
そして、いまを疎外の時と見る。

いまを疎外の時と見ると、以前が疎外の無かった時のように思えてくる。  
そして、以前を懐かしむ。

「疎外の無かった以前」は、幻想である。  
ひとはいつの時代も、  
「昔はおっとりして良かった」  
と思うことになるのである。

ひとが思う「昔は良かった」のうちに、  
「昔のものは良質だった」

がある。  
この「昔のものは良質だった」は、錯覚というわけではない。

テクノロジーの進化は、ひとの生活用具を変える。  
これまでの生活用具の生産者は、ひとの需要に合わせて生業の内容を変える。  
こうしてこれまでの技術は、廃れていく。  
昔の技術をいまも続けているものを見れば、それは昔より確実に劣っていることになる。

「昔のものは良質だった」は、いまは需要の無い昔のものを懐かしんでいる体である。

例：「昔の学者は偉かった」は、いまは需要の無い昔の学者スタイルを懐かしんでいる体である。

よくよく吟味すべし。



### 10.1.3 「自由 freedom」

共同体幻想は、集団を壊さないために個の自由を抑圧する形のものになる。共同体幻想は、個を疎外するものとして立つのである。

個は、共同体幻想に疎外される。

疎外される個は、「共同体幻想からの自由」を想う。

——実際、文学はこれが根底主題である。

「共同体幻想からの自由」は、論理矛盾である。

よって、幻想である。

しかし、ひとは「共同体幻想からの自由」を想わずにはいられない。

ひとは、メルヘンとして「共同体幻想からの自由」幻想をもつ。

「共同体幻想からの自由」は、社会的ムーブメントになることはふつうは無い。

この「自由」はいわば贅沢な自由ということになるからである。

「困窮からの自由が先決問題として現前している——何を甘っちょろいことを！」となるわけである。

「共同体幻想からの自由」が社会的ムーブメントになるのは、一風変わった時代ということになる。

それが実際に起こったことがある。

ヒッピー・ムーブメントである。

このムーブメントはどんなことになったか。

ヒッピーは、「自由」をパフォーマンスしようとする。

「自由」のパフォーマンスを創作する。

しかし自由は、様式が無いことを以て自由である。

「自由」をパフォーマンスするというのは、論理矛盾である。

実際、ヒッピーは、己の様式に縛られる者になる。

「自由」を求めて、己を不自由にしてしまう。

かくして、ヒッピー・ムーブメントは、一時のファッションで終わりとなる。

### 10.1.4 「勝利 victory」

生物の<生きる>の意味は、「自分の DNA を子に伝える」である。

多くの有性生物種は、これを狭き門に成している。

この門に入ることは、競争になる。

結果、《競争に勝った者が、自分の DNA を子に伝える》となる。

「自分の DNA を子に伝える」が<生きる>の意味であったから、これは《生きるとは、競争に勝つこと》になる。

ヒトは、この手合<sup>てあい</sup>の種である。

一方、人の<生きる>は、「自分の DNA を子に伝える」とはますます  
間接的になる。

競争は、何のための競争かわからないものになる。

この位相で、「勝利」が想われる。

それは、「勝利」の内容を思考停止した<想う>である。

かくして、「勝利」は幻想である。

身分は、メルヘンである。

## 10.2 例：「アイヌ」

### 10.2.1 桃源郷<アイヌ>

### 10.2.2 鬼<和人>

## 10.2.1 桃源郷&lt;アイヌ&gt;

知里幸恵 (1923), 「序」

その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、真に自然の寵児、なんと幸福な人だちであったでしょう。

冬の陸には林野をおおう深雪を蹴って、天地を凍らす寒気を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鷗の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べてひねもす魚を釣り、花咲く春は軟らかな陽の光を浴びて、永久に囀さえずる小鳥と共に歌い暮して露つゆとり蓬よもぎ摘み、紅葉の秋は野分に穂揃うすすきをわけて、宵まで鮭さけとる篝かがりも消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、円まどかな月に夢を結ぶ、嗚呼なんとという楽しい生活でしょう。……

アイヌを美化しないではいられない心が、ここにある。

これは、倒錯した心である。

これが、メルヘンである。

現実はどうか。

生活は、苛酷・辛酸を含む。

自然災害があり、病気があり、凶年がある。

そして、ひとが邪な心をもったり、ひとがひとを虐げたりすることは、

どの社会でも変わりはない：

川上勇治 (2003), 「鬼婆々に育てられた娘」 (pp.276-282)

私の育ての婆さんは、ものすごく厳しい人で、私は物心つく五・六歳のころから、炊事用の水くみでもなんでも、大きな声で怒鳴られながら使われていた。……私はどうしたら良いのか本当に困って、いつも陰の方で泣いてばかりいた。そして何よりひどいのは食べ物の差別だった。私の使う食器はひびが入ったお椀や欠けたお椀で、食べ物は家族の食べ残しばかり。犬より粗末な扱いだった。着物も兄たちが着古した、ぼろぼろのものばかりで、私は毎日泣き暮していた。

そんな私もだんだん大きくなり娘らしくなった、ある秋のこと、私を育てた意地悪婆さんは、……言った。「明日お前の兄たちが舟に乗って鮭の漁に出かけるが、お前も兄たちと一緒に行きなさい。兄たちを手伝って、食べる仕度やいろいろな仕事そしてやってくれ。」そうして私は兄たちの漁についていくことになった。

……

兄さんは、「お前はこんなに優しいいい娘なのに、おふくろはどうしてお前がにくいのだろう。この漁に出るときに、俺はおふくろにお前を連れて行って川に突き落として、水におぼれさせて殺してくれ、と頼まれて、お前を連れてきたんだ。だけど俺たちはどうしても可愛いお前を殺せないよ。明日家へ帰るから、お前も一緒に帰ろう。おふくろのおみやげに、たくさんの干鮭をお前が持って帰れば、おふくろも機嫌を直してお前者殺すなんて言わないだろう。」

……

家の中から、婆さんが驚いて出てきた。息子にこの娘を殺してくれと頼んだのに、生きて帰って来たのでびっくりしたのだろう。私の顔を見たたん、婆さんの顔が変わった。鬼婆々になって、「お前が持って来た魚なんか食いたくない。この死にぞこないめ。生きながらえと思うなよ。俺が殺してやる。」と言って、私の髪の毛をつかまえて、振り回し始めた。

……

私を救ってくれた男は私の生まれたコタンへ行って、私の出生の秘密を全部調べてくれた。私の両親は、シヌタツカというコタンに住んでいて、漁場の親方に信用され、使用人二・三十人と一緒に立派な家に暮らしていた。ところが使用人の中に裏切者がいて、ある日突然一家全員皆殺しにされてしまった。次の朝、家の屋根から煙の出ているのを不審に思ったコタンの人たちが家の中へ入って見ると、家族全員殺されていたのだという。その中で生き残っていた生まれて間もない女の子が私であった。

一人生き残った私は、あの意地悪婆さんに引き取られた。婆さんも最初の頃は私をとて可愛がってくれたが、自分が生んだ末娘が成長するにつれて私をうとましく思い始めたのだろう。婆さんの娘は、私と同じ年で、気の毒なほどみにくい女の子だった。まわりの人々は何かと言えば、その娘と私を比較して私ばかりをほめたので、婆さんは自然に私を邪魔者扱いするようになったらしい。

さらに私を救ってくれた若者は、私の生れ故郷、シヌタツカコタンへ出かけて行って私の父母を殺害した犯人をつきとめて、

皆殺したので、お前の仇は討つたぞ、と言ったので、私は泣いて喜んだ。

……

同上、「石狩コタンへ養子に行った弟」(pp.283-290)

昔、石狩川中流のコタンに、父母と息子二人の家族が住んでいました。二人の息子が物心つく年ごろになると、父はいつも「石狩プト(河口)のコタンの村長が、家へ毛皮を買いに来るたびに、お土産にたくさんの宝物をくれたので、今では俺は、このあたりにはないような物持ちになった。その村長に、家の息子二人のうち、兄か弟のどちらかを自分のむこ養子に欲しいので、子供たちが成人したら、ぜひ一人を石狩コタンの自分の家へ寄乙して欲しいと頼まれていたが、お前たちどちらか石狩コタンへ行ってくれないか。」と息子二人に言っていた。

兄は強く反対した。……

あまり強く兄が反対するので、特別父親思いの弟は、「兄さんが行かないのなら、俺が石狩へ行ってもいいよ。」と父に言った。

弟は石狩まで送っていく兄と一緒に、大勢の村人に見送られてコタンを後にした。……

兄は弟の家が出来上がって、チセノミという新築祝が終わってから、自分の故郷のコタンへ帰ってきた。……

しばらく猟を休んでいたので、兄は猟に出かけた。……  
兄は、明日は家に帰って村人を頼んで熊の毛皮や肉などを運ばなければならない、などいろいろ思案しているうちに、うと

うとと眠りに入りかかった。すると不思議なことに目の前に安置してあった熊の頭骨がしゃべり始めた。「早く行かないと、石狩コタンのお前の弟の命が危ないぞ。早く行け。」……

兄は急いで旅仕度にかかった。クチヤチセから飛び出し、暗闇の中を石狩コタン目指して走り始めた。

村長の家へ行ってみると、家の中から人の話し声が聞こえる。村長と村長の娘、つまり弟の嫁になったばかりの女との話し声であった。もう安心だよ、あの人は死んだよ、とか、そうか、それはうまくやったな、それは良かった、と言うのが聞こえてくる。

それを聞いたとたん、兄は家の中へ飛び込んでいき、村長の長いひげをつかんで振り回した。

そして、「お前たち二人で俺の弟をどうしたと言うのだ。死んだ、とか、うまくやった、とか言ったが、弟はどこにいるんだ。」と怒鳴りつけると、村長は平身低頭して、どうか命だけは助けて下さい、と謝り、「あなたの弟は若いけれど大した男で、物凄い雄弁家で、将来私をしのぐ大物になる男と見た。私は私以上に偉くなったり成功したりする者は好きでないんだ。そういう者が私の身内にいるというのは好ましくないのです、娘に命じて毒酒を飲ませて殺すように指示したんだ。私が悪かった。どうか許して欲しい。」と言った。

……

・川上勇治 (2003) : 『増補版 サマウングル物語』, すすさわ書店, 2003.

#### 引用文献

- ・知里幸恵 (1923) : 『アイヌ神謡集』, 郷土研究社, 1923.  
岩波書店 (岩波文庫), 1978

## 10.2.2 鬼&lt;和人&gt;

戸塚美波子 (1971)

……  
 この広大な北海道の大地に  
 君臨していたアイヌ  
 自由に生きていたアイヌ  
 ……  
 人と人とは 殺し合うこともなく  
 大自然に添って 自然のままに  
 生きていたアイヌ  
 この大地は まさしく  
 彼ら アイヌの物であった  
 侵略されるまでは——  
  
 ある日 突然  
 見知らぬ人間が  
 彼らの 目の前に現われた

人を疑わねアイヌは  
 彼ら和人を もてなし  
 道先案内人となった  
  
 しかし——  
 和人は 部落の若い女たちを  
 かたっぱしから連れ去ったうえ  
 凌辱したのだ——  
  
 そして 男たちを  
 漁場へと連れて行き  
 休むひまなく  
 働かせた  
  
 若い女たちは  
 恋人とも 引き離され

和人の子を身籠ると  
 腹を蹴られ流産させられた  
 そして 多くの女たちは  
 血にまみれて 息絶えた  
  
 男たちは  
 妻 子 恋人とも  
 遠く離れ  
 重労働で疲れ果てた体を  
 病いに冒され  
 故郷に 送り返された  
 その道すがら  
 妻を 子を 恋人の名を  
 呼びつつ  
 死出の旅へと発った  
 ……

真っ赤な  
 どろりとした血  
 かって 侵略されるまで  
 いや この大地が  
 アイヌの天地で あったとき  
 けっして流れたことのなかった  
 その血は  
 それ以後 絶えまなく  
 地中へと 吸い取られていった  
 ……

メルヘンは、己を限りなく善にするために、限りなく悪の鬼を立てる。限りない善が滅ぶ理不尽は、限りない悪を以て説明されねばならないわけである。

実際は、アイヌも人と人とは殺し合い、血を流す：

河野本道 (1996), pp. 119-124

## 口頭伝承にもとづく地域集団間の対立関係例表示一覧表

	地域集団間の対立関係		対立要因
1	カフカイ (礼文島)	天塩または増毛	報復
2	香深井・利尻	磯谷	
3	天塩	北見	
4	上川	北見	川の幸・山の幸略奪
5	上川または石狩	十勝	
6	石狩	十勝	天産略奪
7	石狩	釧路方面	
8	イシカリ	ルルモックベ	宝物略奪
9	余市天内山	日高・十勝方面	
10	余市・忍路	小樽	
11	イヨチ	沙流付近	
12	虻田	有珠	
13	伊達	有珠	
14	室蘭	日高	
15	勇払	千歳	
16	門別	〈シャクシャイン〉・うら川	
17	門別	釧路	
18	平取	ユブツ・クスロ	
19	平取	十勝・釧路方面	
20	平取	十勝地方	略奪
21	平取	十勝	宝物略奪
22	ピバウシ (平取二風谷)	十勝	宝物略奪
23	静内御殿山〈鬼ひし〉	〈シャクシャイン〉	
24	静内炭山沢入口〈鬼ひし〉	〈シャクシャイン〉	
25	静内農屋	十勝	

26	静内	十勝	
27	〈鬼ひし〉	静内入舟〈シャクシャイン〉	
28	静内東静内	梶別	
29	浦河	トカチ	
30	様似	トカチ	利剣略奪
31	広尾	北見	
32	幕別 (猿別)	日高	
33	豊頃安骨	釧路	
34	豊頃安骨	日高	
35	豊頃旅来	北見・根室	
36	豊頃旅来	日高	
37	豊頃	日高	
38	旅来	十勝太	漁場侵害
39	浦幌乙部	白糠・釧路	宝物略奪
40	浦幌乙部	北見	
41	本別	釧路	
42	本別	釧路・北見	
43	本別仙美里	クシロ	
44	本別仙美里	日高または厚岸	
45	本別仙美里	十勝	
46	足寄	釧路方面	
47	陸別	釧路	
48	陸別 (十勝)	釧路・厚岸 (十勝)	宝物略奪
49	十勝 (陸別〈カネラン〉)	厚岸〈シュマンベクル〉	もの取り
50	白糠	厚岸	宝物略奪
51	阿寒 (庶路)・(シヅナイ)	十勝	娘奪い
52	阿寒	厚岸・根室	宝物略奪
53	釧路	十勝・厚岸・根室	
54	釧路	十勝・厚岸・根室	

55	クスリ	ウラスベツ	報復
56	釧路	クスリの奥	資源略奪
57	釧路	厚岸	漁場侵害
58	釧路	厚岸	
59	釧路	厚岸・根室	宝物略奪
60	釧路	アッケシ・ネモ口	
61	釧路	斜里・網走・常呂・ 美幌・北見・湧別	宝物略奪
62	昆布森・厚岸・霧多布	北見	鎧略奪
63	標茶	舎利・根室	
64	厚岸	屈斜路・阿寒・塘路・網走	食糧確保
65	標津	北見	財宝略奪
66	網走	湧別・紋別	宝物略奪
67	佐呂間	斜里	
68	佐呂間	トコロ	
69	佐呂間・常呂	湧別	
70	常呂(北見)	斜里・十勝	
71	遠軽(北見)	十勝	
72	遠軽(湧別)	上川・十勝	猟場侵害
73	紋別	日高	猟場侵害 ・報復
74	国後・目梨	美幌	
75	国後・目梨	美幌	
76	くなしり	釧路	宝物略奪
77	クリル	根室	宝物略奪 ・奴僕略奪
78	{クルムセ(クルンセ)}	クナシリ・ハボマイ・ ネムオロベシ・厚岸・釧路・ (遠矢)・北見・十勝・ピエイ	

つぎの伝承(ストーリーがつながる程度に引用)は、表中の「ピパウシ(平取二風谷)——十勝 宝物略奪」に対応するものである：

川上勇治(1976),「コタンの妖刀」(pp.9-28)

……

お婆さんの見た外の光景は、非常に恐いものであった。白い雪明りと、遅く出た半月の明りの中で、今まで見たこともない大勢の異様な風体の男や女、老人、子供までが加わり大きな円陣を作っていた。……お婆さんは彼らの動作や風体を見て、すぐトパッドミ(夜襲)だと判断した。

トパッドミとは沙流以外のたとえば十勝とか石狩とかのひとつの大きな部族が、一族を引連れて攻め寄せ、ねらいをつけたコタンに焼討ちをかけ皆殺しにして、そのコタンを占領し住みついたり、または宝物をうばい取り、ピリカメノコ(美人)がいると連去ったり、いわばこれは、アイヌ間の戦争であった。だからアイヌたちはこの戦争にそなえて、各地にチャシ(とりで)を築いて常時見張りを続けたとのことである。女や子供を連れているということは、多分うばい取った宝物やその他の物を運搬するのに、一人でも多くを必要としたからだと思われる。

……

オツテナはみんなの意見や、長老の話を聞き、いちいちうなずいていたが、やがて決断したのかやおら立ち上り「もうぼつぼつ夜明けだ。お婆さんの話によると彼らは大体三十人位だ。年寄りや女子供がまじっているので、あまり遠くまで逃げていない。これから追討ちをかけひとり残らず討ちとらなければ、これから先何度もこのように攻めて来られたら大変だ。……



イワンチシリのチャシまで急いで先まわりして、奴らが川伝いに逃げるのを待伏せしてひとり残らず矢で射殺してしまえ」と命令した。

総勢十人ほどの足の早い屈強な男たちが、弓矢刀などを持ち、勇んでポロチセから飛んで出て行った。

……

このチャシでトパッドミ隊の三分の一の男たちが矢で射殺されたが、その他の連中は、なおも沙流川の奥へ奥へと逃げて行く。

……

ポロサルアイヌたちは味方の矢傷の手当をしたり、負傷者をコタンへ連れて帰るため、戦いを一時中止し、逃げるトパッドミ隊を追わないことにした。

そのうちにチャシの近くに、三人の屈強なアイヌがあらわれ、……ポロサルアイヌたちは負傷者を連れて全員がコタンへ帰ることになり、三人だけがトパッドミ隊の後を追うことになった。

……

イワナイという沢の近くに来た時、三人はトパッドミ隊の足跡のみだれを発見した。おかしいと思い注意しながらなおも進んで行くと、ある小沢のくぼみに、新しい松の枝が積み重ねてあった。不思議に思い、この松葉を取りのぞいてみるとひとりの女の死体が出て来た。調べてみると、この女は妊娠しておりもう臨月らしい様子であった。女はトパッドミの仲間である。……

三人のアイヌたちはここでカムイノミをした。この女の死体の乳房を切り取りそれぞれ一口ずつ呑みこんで、そのあと、も

し気分が悪くなりもどすようなことがあれば、その者は武連がなく、無事にコタンに帰ることが出来ないのである。また、もどさなかった者は心配ないことなので、呑みこむ前に無事を神に祈るのである。これは一種の占いのようなものだと思うが、アイヌの伝説のなかにはよくこのような話が出てくる。

三人のアイヌたちもこれを行なったのである。三人は女の乳房の肉を切り取り、それぞれひとくちずつ呑みこんだ。するとまもなく三人のうち一人が気分が悪くなり、二人の目の前で真赤な生肉をはき出した。このはき出した人はペナコリから行ったアイヌだということである。

……

ウサップの森林を過ぎると前方に大勢のトパッドミたちが先を急いでいるのを発見した。イワンチシリで討死した残りのトパッドミたちである。女や子供を含めて約二十人である。……

この場所で十人あまりのトパッドミたちが矢で射殺されたということである。

……

生き残ったトパッドミ隊は、なおもチロ口(千栄)を通り過ぎ沙流川の本流の奥へ奥へと逃げて行った。三人のアイヌたちは再び追いかけて始めた。

古老たちの話によると、このトパッドミに来た連中は一人残らず殺してしまわなければならないと言う。なぜなら、トパッドミ隊の子孫が一人でも生き残るとあとで必ず仇討に攻め寄せて来るので、後難を恐れるアイヌたちはたとえ子供や女でもすべて殺してしまったということである。

……

とど松、えぞ松、だけ樺、真樺の原始林の山の中腹あたりの斜面を横切り、三人のアイヌたちは固雪の上を風のように走っていた。まもなくトパッドミ隊に追いついた三人は、残ったトパッドミたちを情け容赦もなく斬りまくった。日勝峠近く日暮れ時のことである。

トパッドミの者もなかなかうでのたつのがいて勇敢に戦ったが、とうてい三人のアイヌの敵ではなかった。あとで恨みを残さぬため、女も子供も老人も残っているものは全員殺さなければならない。男たちの戦う怒声と女子供の泣きさけぶ悲鳴があたりの山々にこだまし、白い雪の上一面に真赤な血をそめて戦いは終わった。

……

アイヌの伝説によれば、戦いのいかなる場面においても必ず仲間の一人か二人を逃して自分たちの味方に連絡するということである。この戦いの場合、トパッドミの側も二人が落ちのび、一心に日勝峠のはい松の中をくぐり抜けて十勝の方へ逃げのびたのである。三人のアイヌたちは戦い終ってほっと一息ついたとき、二人の足あとが峠の方へ続いているのにふと気がついた。今日はチロ口あたりまで下って帰路につこうかと考えていたが、たとえ一人でも逃げのびれば、何日か後に援軍を引連れて仇討に攻め寄せて来る恐れがあるので、また引続き翌朝から追跡することにした。

……

固雪の上を歩くことにかけてはすばらしい速度を誇る三人は、疾風のように十勝原野をめざして走っていた。太陽が空の

真中を通り幾分西にかたむいた頃、雪原の彼方にポツン、ポツンと、五、六軒のアイヌ・チセがたち並んでいるのを発見した。三人のアイヌたちは用心してコタンの近くの萱原でかくれて日の暮れるのを待ち、様子を見ることにした。

……

三人のアイヌのうちの一人在、チセの内部を探るため屋根の上まで身軽に飛び上り、リクススイ（煙出し窓）から中をのぞきこんだ。いるわ、いるわ、大勢のアイヌが協議のまっ最中である。

その時リクススイのあたりに異様な気配を感じたチセの中の一人のアイヌが、すばやく弓に矢をつがえ、リクススイから顔をのぞかせたアイヌに矢を射た。矢は正確にアイヌの目に命中し、異様なうめき声を上げて屋根から地上へ転落した。下でこれを見ていた二人は怒りに燃え、一人はロルンプヤル（東測の窓）から、一人はセム（家の入口の空間）のある入口から万を振りかざしてチセの中へ乱入した。そうして手当たり次第斬って斬って斬りまくった。せまいチセの中で二人は自由にあばれることが出来たが、チセの中にいた人たちは手出しも何も出来ないうちに皆殺しにされてしまった。

戦いすんで目をやられたアイヌを介抱しようとしたが、時すでに遅く矢の毒が全身にまわり手のほどこしょうもなく息を引きとった。先に書いたように、女の死体の乳房を呑んではき出した時すでにこのアイヌの運命は決まっていたのである。

二人はまったく人影のなくなったコタンのチセ全部に火をつけて焼き払い、帰路につくことになった。

……

そもそも、「人と人が殺し合うことなく」が嘘であることは、ユカル（英雄伝）を思い浮かべれば、簡単にわかることである。

ユカルは、全編が人と人の殺し合いの話である。

---

#### 引用文献

- ・戸塚美波子 (1971) : 「詩 血となみだの大地」  
旭川人権擁護委員連合会『コタンの痕跡——アイヌ人権史の一断面』,  
1971, pp.95-107.
- ・河野本道 (1996) : 『アイヌ史/概説』, 北海道出版企画センター, 1996.
- ・川上勇治 (1976) : 『サマウングル物語』, すすさわ書店, 1976.

## 11 「正道」

11.1 「正道」 幻想

11.2 例：国学の「古道」

## 11.1 「正道」幻想

共同体幻想は、矛盾の隠蔽であり、欺瞞である。

この欺瞞を見る者は、「正道」を立てたくなる。

「正道」は、幻想である。

一方、「正道」を立てる者は、ひとの生活にこれが貫徹されることを希む。

現前は、そう成るべくして成っている。

よって、「正道」の貫徹が運動されるとき、その運動は<空回り>になる。

実際、ひとは「正道」に従わない。

無理を通せば、迷惑行動になる。

時と場合によっては、とんでもない破壊行動になる。

## 11.2 例：国学の「古道」

11.2.1 国学の心理

11.2.2 「やまとだましひ」

11.2.3 復古神道

11.2.4 「大人」<sup>うし</sup>

### 11.2.1 国学の心理

国学者は、〈外国かぶれの時流に憤懣やるかたない者〉である。  
 彼らはインテリであり、そして外国かぶれのインテリが主流になっている世相に、がまんがならない。  
 「漢才」<sup>からざえ</sup>「さかしら心」の言い回しで、外国かぶれを批判する。

さかしら心が主流になるのは、理のあることである。  
 その理は、「悪貨は良貨を駆逐する」の理である。  
 良貨を説けば悪貨が無くなる、とはならない。  
 国学者には、この達観がない。

達観の無い者は、悪貨をやっつける気持ちが強過ぎて、分を外してしまう。  
 自分が実際に研究としてやっていることは、『万葉集』とか『源氏物語』とか『古事記』の読解である。  
 しかし、これを「古の心」「古道」の探求と定めてしまうのである。  
 なぜ、「古の心」「古道」となったのか。  
 「漢才」に対立する形を求めたからである。

ひとはだいたい大袈裟に考えて間違えるものであるが、国学者の間違ひもこれである。  
 「漢才」という捉えが、そもそも大袈裟である。  
 大袈裟には大袈裟が対立する。  
 その大袈裟が「古の心」「古道」である。

国学は、『古事記』研究に進んで、『古事記』を真言とするようになる。  
 『古事記』の中に出てくる神々を立てる。  
 こうして、国学は宗教になる（「復古神道」）。

『古事記』に順えば、日本は神の本国であり、天皇は神の系統である。  
 こうして日本は「神国」であり、他の国とはぜんぜん格が違う。  
 そこで国学は、

〈日本が皇国として立つことを願う者〉

の理論になる。

実際、維新政権の根拠理論となった。

国学が立てた「古の心」——「やまとたましひ」——は、いまや皇国の民の資質というものになる：

「日本人には元来、「やまとたましひ」がある。

そしてこのことを以て、日本人は外国人とは別格である。」

国学のこのくだりは、

〈外国かぶれの時流に憤懣やるかたない者〉

を誘惑するところである。

この誘惑を断つものは、科学である。

科学に即けば、国学の「神」はフィクションである。

「やまとたましひ」は、ナンセンスである。

## 11.2.2 「やまとたましひ」

平田篤胤『古道大意(上)』

此方の學風を古學と云ひ 學ぶ道を吉道と申す故は、古へ儒佛の道いまだ御國へ渡り来らざる以前の、純粹なる古への意と、古への言とを以て、天地の初めよりの事實をすなほに説考へ、その事實の上に眞の道の具ってある事を明らむる學問である故に、古道學と申すでござる。……  
歌を詠むも古の言を解くも、皆神代の道を知べき便……

国学は、古学を通じて、「古の心」への復古を唱える立場である。この「古の心」を、「やまとたましひ」の言い回しで主題化する。

平田篤胤『古道大意(下)』

さて夫ほどに結構なる情を、天津神の御靈によって、生れ得てゐるに依て、夫なりに偽らず枉らず行くを、人間の眞との道と云う。  
又其生れ得たる道を邪心の出ぬやうに修し齊へて、近くたとへやうならば、御國人は自からに、武く正しく直に生れつく、是を大和心とも。御國魂とも云でござる。  
……  
素より御國人は。皆々下の心に、此美しく潔き心を持って居るけれども、大かたは外國どもの心に移り、其の本意が曇ってゐる、是をどうぞ磨き出して、元の美しい心に成りたいものでござる。

実際、思想としての国学は、「やまとたましひ」を立てるだけのものがある。

しかもこの「やまとたましひ」が、ナンセンスときてる。

「やまとたましひ」を立てるのは、非合理を欲する心である。

実際、「やまとたましひ」で盛り上がる時節は、異常な時節である。

国学は、ひとが「やまとたましひ」で盛り上がりたくなる異常な時節に、元気づく。

ひとは盛り上がって、つぎに幻滅する。

この幻滅とともに、国学ブームも止む。

幕末維新の動乱期にこれが有り、國體思想の軍国主義期にこれが有った。

### 11.2.3 復古神道

国学は『古事記』を真言とする。

これは、古事記の神々を立てるということである。

こうして国学は、宗教になる。

平田篤胤『古道大意(上)』

一體眞まことの道と云うものは、事實の上に具って有るものでござる。

……

事實を記してある其書物はなにじゃと云ふに、古事記ふることぶみが第一でござる。……

この御記に、天地を御始め遊はしたる神々の御事實を始め其餘の事實に、盡く萬の始め、道の趣は具って有るでござる。

この宗教は「復古神道」と呼ばれる。

この宗教の著しい特徴は、国粹主義になることである。

同上

御國ばかりで無く、諸もろもろの外國に、人だねの生たるのも、又悪いながらも國らしくなり、夫々に物の出来たるも、皆此神の御靈に因ることで、其證據には、其國國に各々その傳へが有る。

国学は、宗教になることで、現成論(「現前は理の成就」)になる。

現前は、神の理の実現ということになるから、肯定的に受け入れねばならないわけである。

しかし国学は、「古道」を正道として立てている。

現前受容と古道は両立するのか。

両立しない。

国学は、自己分裂ていの体である。

→ 13.2 国学の現成論



## 11.2.4 「<sup>うし</sup>大人」

宗教の国学は、『古事記』が聖書で、四大人の著作が經典である。

平田篤胤『古道大意(上)』

さて翁 [本居宣長] の著されたる書物が五十五部、卷数百八十餘卷有て、何れも何れも、學問する者は常に傍を放されぬ物で、  
……

実際、文献をこんなふうに掲げる者は、「学僧」である。

「学者」ではない。

<学問する>には、<一つへの埋没を却ける>が含まれるのである。

## 12 「革命」

12.1 「革命」 幻想

12.2 例：60年安保のブント

12.3 例：幕末維新の平田門人

## 12.1 「革命」 幻想

### 12.1.1 「革命」の構図

#### 12.1.2 死屍累累

#### 12.1.3 アジテーター

#### 12.1.4 「正義」

### 12.1.1 「革命」の構図

<生きる>は、<苦勞して生きる>である。

しかし苦勞には、程度がある。

<どうってことのない苦勞>から<耐えられない苦勞>までである。

また、個によって感じ方も違ってくる。

ここに、「耐えられない苦勞に耐えている人民」「耐えられない苦勞を人民に強いる支配者」を立て、「人民による支配者の打倒」「支配者のいない世界」を説く者が現れる。

「革命論者」である。

革命論が現れると、つぎに「革命」のアジテーターが現れる。

「人民」は、「耐えられない苦勞に耐えている人民」だけではない。

彼らを革命に同調させないと、革命は成らない。

彼らを革命に同調させるには、どうするか。

ひとはだいたい正義漢なので、正義を訴えられると、これになびく。

アジテーターは、「正義」を用いる。

「抑圧に対し見て見ぬふりをするのは不正義だ」「人民解放の戦いに参画せよ」を説く。

このアジテーションは同調者を得る。

こうして党 / 派が形成される。

「革命党」というわけである。

併せて、「革命」の実際行動（「実践」）に入っていく者が現れる。  
「革命家」である。

革命家は、「解放」「新体制」の内容に思考停止する者である。  
「敵を倒さないうちは話にならない」のロジックで、思考停止を自らに許す。

「敵を倒さないうちは話にならない」の行為は、思想・立場が関係なくなる。

「敵を倒す」の一点で一致する者は、仲間である。

そして敵が倒れた後、思想・立場の違いで争うことになる。

争いに負けた者は、「こんなはずではなかった」を言う<sup>てい</sup>体で、舞台から降りていく。

## 12.1.2 死屍累累

「革命」は支配者の交替を成すに過ぎない。

この過程で、旧支配層を倒す戦いがあり、そして新政権樹立が成ればつぎは大粛清である。

「革命」は、＜死屍累累＞が代償になるものである。

「革命」は、割が合わない。

実際、「革命」の理は、「割があう」ではない。

「革命」の理を求める存在階層は、「生態系」である。

「系の新陳代謝」——これがその理である。

「革命」の理は、戦争の理と同じである。

それは、＜破壊＞の理である。

＜破壊＞の理は、生態系の新陳代謝（「攪乱 disturbance」）である。

### 12.1.3 アジテーター

現前に疎外される者は、「こうであるべき」の幻想を紡ぐ。

世の中は、この手の幻想に溢れている。

ある者は、ある幻想が気に入って、あるいは「それはきっといいものだ」と当て込んで、その幻想にのめり込もうとする。

さらに、のめり込むのが自分だけではもったいないと思う者は、その幻想を人に伝えようとする。

後者の位相を、「アジテーター」と謂う。

註：幻想の内容を一応弁<sup>わかま</sup>えて伝えている場合、「伝導者」と謂う。

本論考では、「一応弁えて」が程度問題になるので、「アジテーター」と、一つに括っておく。

アジテーターは新人を勧誘し、つぎにこの新人がアジテーターになる。こうして、集団が形成される。

この集団の位相を、「教団」とか「党」とか「派」と謂う。

教団 / 党 / 派は、〈スローガンを信じる〉でつながる者の集団である：

- ・教団 / 党 / 派に入る者は、中身を知らずにスローガンにとびつく者である。
- ・教団 / 党 / 派の員にしても、スローガンの中身——信じるべき当のもの——を知らない。  
員は、「自分は〈信じるべきもの〉の習得過程にあるのだ」の思

いで自足している者である。

教団 / 党 / 派の実体は、スローガンとモラトリアムである。

( → 『禅とは何か——ダブルバインド型自己欺瞞の系力学』 )

教団 / 党 / 派は、「実践」を立てる。

実践しなければ、スローガンとモラトリアムだけの者だからである

実践する教団 / 党 / 派は、はた迷惑ないし危険な存在になる。

実際、自分が信じているはずのものを知らない者が、「実践」をやり出すわけである。

もの知らずが「実践」を己に課せばどうなるか？

ばかなことをやり出すだけである。

それは、破壊行動になる。

こうして、教団 / 党 / 派の「実践」は、「迷惑行為」で終始する。

ひとは「アジテーター」を過激な相でイメージするが、世の中に溢れている師弟関係の「師」こそ、アジテーターの典型である。

実際「師弟関係」とは、改めて考えてみれば異常な関係である。

「先生と呼ばれるほどの馬鹿でなし」は、この異常を知る者の銘である。

「先生と呼ばれるほどの馬鹿でなし」は、「師をもつほどの馬鹿でなし」に転じる。

このこと、よくよく吟味すべし。

### 12.1.4 「正義」

「革命」には、「悪者退治」「正義の戦い」の意味が与えられる。

「正義の戦い」に参画しないのは、不正義である。

よって、「革命」に参画しないのは、不正義である。

不正義でいることに居心地悪く感じる者——正義漢——は、「革命」に参画する。

害虫駆除が示すように、「悪者退治」は敵に対する破壊が容赦の無いものになる。

ひとは殺戮・殲滅に満足する。

「革命」は、このようになる。

一般に、「聖戦」が、戦争のうちで最もむごたらしいものになる。

しかも、「悪者」とは、悪者にされた者のことである。

<相手を悪者にする>は、恣意的に運用される。

例：連合赤軍のリンチ殺人事件

「正義不正義」「善悪」は、幻想である。

世の中のことを二値論理で割切ってしまう者は、考えが幼稚な者である。

「聖戦」は、《幼稚な者が、彼らが「悪者」と定めた者を、殺戮する》の絵図になる。

例：毛沢東「文化大革命」の紅衛兵

かくして、幻想のうちで「正義」ほど、たちがわるく危ないものはない。

## 12.2 例：60年安保のブント

### 12.2.0 要旨

#### 12.2.1 西部邁『六〇年安保』

#### 12.2.2 「権力・自由」

#### 12.2.3 非行者

## 12.2.0 要旨

生きることは、生業を立てることである。

集団は、個人それぞれの生業が立つように自己組織化する。

この自己組織化は、＜体制＞を現す。

体制は、個の自由の制約である。

ひとのうちには、この制約に拒否反応してしまう体質の者がいる。

「非行の者」（「過激な者」ともいう）である。

かれらは「自由」を想う。

さらにこのうちから、「自由」を立てる者が現れる。

「自由」を立てることは、論理矛盾である。

体制に生かされて体制を否定するからである。

「自由」は、幻想である。

実際、「自由」を立てる者は、生業から自由の者である。

生業をもつ者は、生業にきゅうきゅうとしていても生業から離れられない者であり、「自由」を言われても「自由」の考え様が無い者である。

「自由」の実現は、体制の打倒を含意する。

体制は進んで打倒されてくれないから、この「体制打倒」は「体制打倒の暴力を組織し解放する」である。即ち、「暴力革命」である。

このとき、「自由」を求める者は、ただの非行の者（過激な者）であるから、「革命」ストーリーの主人公にはならない／なれない。

そこで、生活困難者を主人公に立てる。

「生活困難者を生むのは体制が悪いからであり、体制を改めれば生活困難者は無くなる」のイデオロギーがつくられるわけである。

元は己の非行体質であるが、「ひとのため」のフィクションを立てて、自分を正義の者にする。こうして、一旦自己満足に至る。

しかし、「革命」行動の段になると、たちまち困ってしまう。

「生活困難者」は立ってくれない。

行動の大義も方法も立たない。

「革命と自由」の者は、本質的に「ノンポリ」である。

この体<sup>てい</sup>で、行動を起こす。

彼らの行動は、社会から浮き上がったものになるのみである。

馬鹿騒ぎで終始してたちまちに止むのが、道理である。

60年安保のブントは、これであった。

「60年安保のブント」は、これの本質が

西部邁『六〇年安保——センチメンタル・ジャーニー』

文芸春秋，1986.

に過不足無く書かれている。

そこで本節は、この書からの引用を中心に構成する。

なお引用ページは、読者がアクセスしやすいこの文庫版（文春学藝ライブラリー，2018）のものを示す。

### 12.2.1 西部邁『六〇年安保』

60年安保のブントとは、つぎのようなものであった：

西部邁『六〇年安保』, pp.23-26.

いったいブントはなにを信じていたのか。ほとんどなにものをも信じていないという点で、ブントほど愚かしくも傲慢な組織は他に例がない。彼らにも理論や思想のかけらはあったし、それらを体系化しようという努力もなくはなかったのだが、要するに信じるに価するものを獲得していなかったのである。

たとえば、新安保条約についていうと、それが日本の力が向上したことの印なのだとしてブントはわかっており、それならば、新条約を阻止することによって強化されようとしている日本帝国主義に、痛打を与えよというのがブントの構えであった。明断な理解であり明瞭な姿勢ではある。しかし、帝国主義とやらの現段階、それに代るべき体制、そこで生きる人間の生活など、要するにあらゆる根本問題についてブントは蒙昧であった。マルクス主義の文献から自分の情念に都合のよいところを抜き出してきて継ぎ合わせるのがブント流なのであった。

彼らがかろうじて信じることができたのは、戦後思潮のなかに、つまり先にのべた様々の魔語〔引用者註：「平和」「ヒューマニズム」「民主主義」「進歩主義」〕によって操られる言語空間のなかに虚偽や欺瞞が充満しているという感覚であった。その感覚にはたしかな経験の裏づけがあったのである。なぜとって、ブントはその言語空間のなかで育った人間たちを主要

な構成員としていたのだからである。ということは、自己のうちにも虚偽や欺瞞がふんだんにあると察知するということである。

様々の魔語は戦前世代にとってはようやくにしてありついた恩恵だったのであるが、戦後世代にとっては懐疑すべき、さらには打破すべき空語と映った。戦後思潮の虚妄を発くという否定性においてブントの情念は燃え上ったわけだが、その否定性がいずれ自分自身にたいしても向けられざるをえないであろうという予感がブントをとらえていた。ブントにおける暴力への傾きは、あきらかに、戦後思潮にたいする、そしてそこで育ってきた自分自身にたいする、この否定性の気分に根ざしていたのである。暴力じみた過激な行動によって明るみに晒されたのは、反体制を標榜しながら体制に寄生しつつあった戦後思潮のカラクリであった。

もし安保闘争の密度のことをいうのなら、ブントおよび全学連主流派の過激な行動がそれを与えたというべきである。過激派は、徒手空拳の未熟な暴力によって、体制および体制内反体制に衝突した。それによって作りだされた不協和音は戦後思潮に巣食う亀裂を端的に表象していたのである。彼らは「安保闘争の不幸な主役」とよばれたが、それは安保闘争を盛り上げた拳句に解体をとげたからではない。それは、安保闘争をささえた思潮のカラクリを、暴力という別種のカラクリによって解体させようとしたものたちの逃れがたい不幸である。こうした負の密度しか見出しがたいからこそ、それは致し方なく一種の馬鹿騒ぎなのである。



ブントはこの馬鹿騒ぎの主演となるにあたって、「革命」という魔語に頼ろうとした。ブントにあって「革命」とは、純粹性とか徹底性とかを表す理念語であった。したがって、「革命」という言葉は異常ともいえるほどに真撃に発語されたのだが、ほとんど誰ひとりとして、その言葉が現実のものとなった状態を想起できなかつたし、しようとしなかつた。想起できない以上、それはユートピアですらなかつたのである。

ブントの過激さとは、二年近くの短い期間であつたとはいえ、革命を幻想と知りつつ幻想してみた軽率さのことであり、そして軽率を一種の美德とみなした腰の軽さのことである。つまりブントとは一個の滑稽にほかならない。しかし、本質的に浪漫的なるものとしての人間存在にとって、滑稽を免れることなどできる相談ではない。「革命」という魔語を喜劇の文脈において用いたところに、またそうすることができたというところに、ブントの面白さと倅せとがある。

むろん、そのような浪漫のあとには虚無や退廃が踵を接してつながっていた。安保闘争の末期においてブントが全力をもって過激的たろうと悪戦していたのは、虚無や退廃をすすんで招き入れつつそれらを拒けようとする複合感情が、加速的に高まったせいである。絶頂のあとに没落がくるであろうというのは、すでに実感にまで固まっていた。牧歌的な時代のこととて、死に場所などは見つかるはずもなかつたのだが、左翼方面における過激的心性に死が近づいていることは明白であつた。

## 12.2.2 「権力・自由」

西部邁『六〇年安保』, pp.27-29.

ブントが自己肯定したのは、権力との争闘をあげっぴろげになそうとする決意についてである。争闘といっても、機動隊との衝突にせよ左翼内部での党派抗争にせよ、まだ初歩の段階にあり、それゆえに、一種開かれた心で権力に向きあうことができたというだけのことなのであろう。しかしそうだとすると、権力の本体を民衆の眼前におびきだそうとする意志は、ブントの隅々にまで及んでいたようである。権力の所在を隠蔽しているのは戦後民主主義にほかならぬということをブントは直観していた。

主権在民という虚構によってパワーやオーソリティのなんたるかが、またなんたるべきかが、いちじるしく不鮮明な環境のなかでブント世代は育ってきた。しかもアメリカという外国権力が表面に出てくるために、国内権力の本質は、国家のであれ旧左翼のであれ、ヴェールに隠されていた。権力と赤裸に対峙してみることに、それがブントの欲望なのであつた。そしてその欲望を解き放つために、ひとつに、すでにみたように「平和」の魔語にたいして「革命」の魔語を対置したのであるが、もうひとつには、「民主主義」の魔語にたいして「自由主義」の魔語をぶつけたのである。

自由の意味するところについてきちんとした理解がなされていたというのではない。また「自由主義」という言葉が神聖視されていたのでもない。だがブントに自由の気分が汪溢してい

たのは確かである。多数決制にたいする軽侮の念は並大抵ではなかった。言論の自由がまず優先されたのであって、多数決制がそれを抑圧しようとする場合には、言論の自由は、暴力や策略の助けをかりてでも、自己を押し通そうとした。

むしろそれはアナキズムへの傾斜である。もっといえば放縦放埒への傾斜である。行動における過激主義を首尾よくなしとげるためにはなにほどかの秩序が必要になり、そのためにブントにおける無秩序への傾斜には自然と抑制が働きはした。しかしそれでも、自由としての生を危機としての生にまで深めることによって、つまりそうした生の密度によって、多数者の凡庸な生を撃とうとする意欲がブントの活力だったといえる。

言論の自由は認識の自由にまですすもうとしていた。つまり、認識の世界における権力に唾する言動が目立っていた。いわゆる進歩的文化人がブントによって軽蔑されたのは、それら知識人が共産主義から隔たっていたからでもないし、過激な行動から離れていたからでもない。たとえ表面でそれらが軽蔑の理由に挙げられることがあったとしても、本当の理由は、彼ら進歩的文化人が民主主義を至上のものとする認識に与していたこと、それがブントの気に喰わなかったのである。

ブントが進歩的文化人にとって代る認識をつくりだしていたというのではない。民主主義に代って自由主義の認識が考究されていたというのではない。ありていにいって、ブントにはまともな認識などなかったのである。人材もいなかったし余裕もなかった。要するに、馬鹿な若者の集まりにすぎなかったのだ。しかし、その馬鹿さ加減のうちに、開かれた認識へといたる可

能性がいくばくか看取できたのである。

マルクス主義も共産主義も糞くらえ、とってのける人間を少からずふくんでいたのが共産主義者同盟、つまりブントである。そんな自由な組織は、そもそも組織といえるほどのものではないのであって、空中分解して当然である。その分解のあと、ブント出自の人間のうちどれだけのものが、言論の自由そして認識の自由というものの真の魅力と真の怖さを知ったのか、私はつぶさには知らない。いずれにせよ、軽率かつ不遜に自由という名の禁断の木の実を食した人間たちにはそれ相応の報いが下っているのに違いない。

### 12.2.3 非行者

西部邁『六〇年安保』, p.11.

熱狂は大なる確率で非行につながる。

多数者のとは目立った形で異なる素行、それが非行なのだとすると、否応もなく非行者を模索するのが私の交際法である。私自身はできるだけ目立つまいと努めるのだが、非行者との縁が私をひきつけて己まないのである。

実のところ、私の体験した政治とはそうした種類の縁のことなのであった。その意味での政治ならば、物心ついてからずっと私は政治とのつながりを絶ったことがない。

畢竟してみるに、ブント体験が私にもたらしてくれた最大のものは、非行者との縁を絶つことの不可能を教えてくれた点にある。私がこれから描いてみたいのは、ブントにおいて私が直接にふれあった非行者の群像なのである。

「個の多様性」を説く者は多いが、その意義を講ずる論にはほとんどお目にかからない。実際、「個の多様性」の意義の論じ方は生態学的になるのだが、「個の多様性」を説く者は生態学を欠く<sup>てい</sup>体である。

「個の多様性」とは、〈自分が活かされる場〉が個によって違うということである。

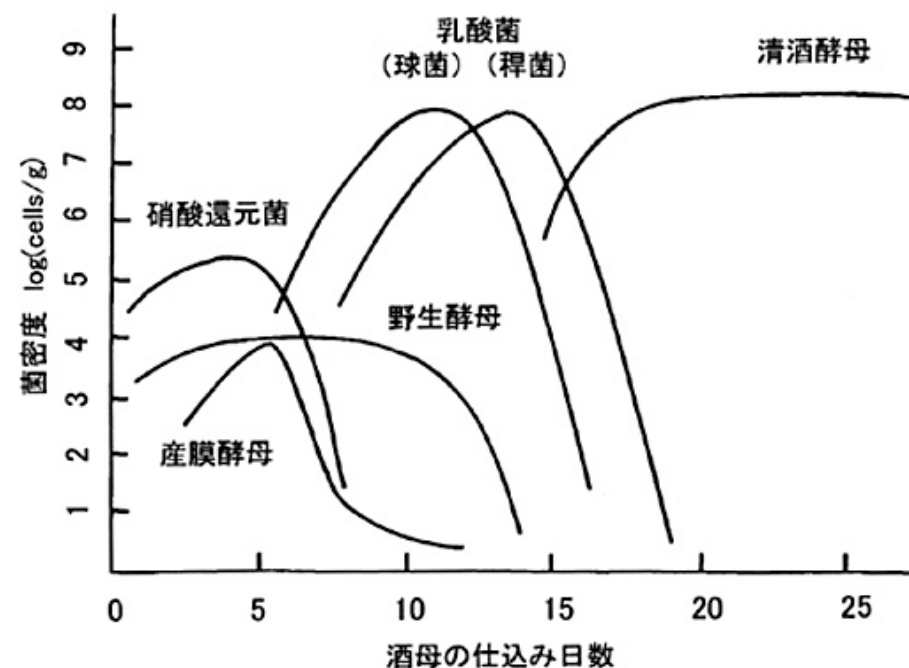
種が「個の多様性」を孕むのは、種が〈遷移〉をダイナミクスにして生きるものだからである。

つぎは、「遷移」のイメージ：

・裸地ないし攪乱痕地からの植生の遷移：

1. コケ植物・地衣類  
陽性1年生植物  
陽性多年生植物
2. 陽樹  
陰性植物
3. 陰樹

・日本酒づくりは、微生物遷移の利用である：

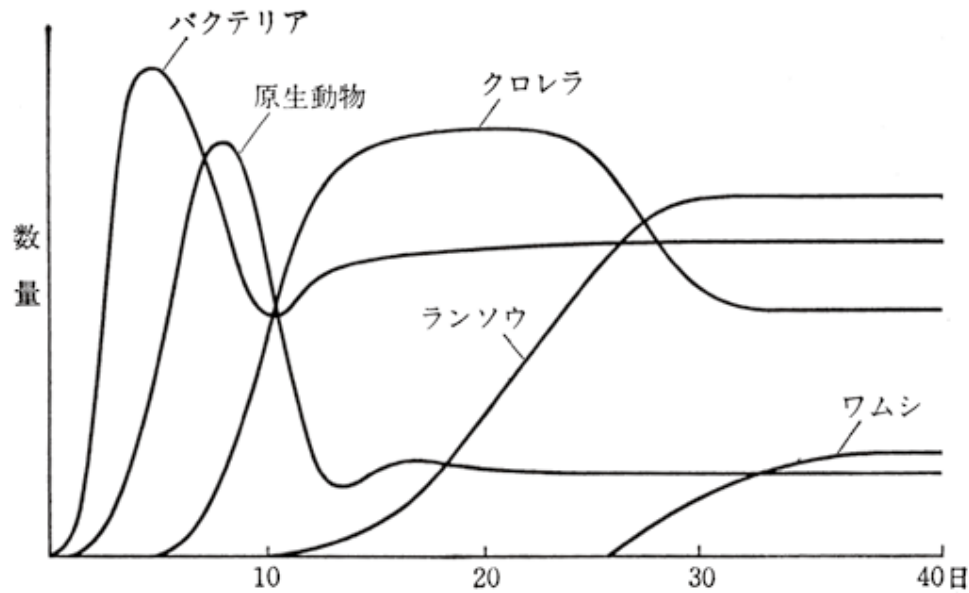


(秋山裕一『日本酒』(岩波新書), 岩波書店, 1994)

・フラスコに水を入れて放置する

この中に、空気中に漂っている微生物が落ちてくる。

そしてこれが、フラスコの中に「遷移する生態系」を現す：



(栗原康『かくされた自然——ミクロの生態学』, 筑摩書房, 1973)

「非行者」とは、攪乱期が<自分が活かされる場>になる者である。

結果的に、攪乱の収束に一定の役割を果たす。

安定期になると、これは邪魔者になる。

体制の排斥するところとなる。

例：ヤクザ

## 12.3 例：幕末維新の平田門人

12.3.1 「復古」幻想

12.3.2 平田門人

12.3.3 島崎藤村『夜明け前』

12.3.4 幻想と現実のダブルバインド

12.3.5 憂国

### 12.3.1 「復古」幻想

古学は、いまの世の中を宜しくないと見る。

そして、いまの世の中が宜しくないのは、民において<日本国の民の心>が失われている——古のものになっている——からだ、とする。

そこで、古のものになっている<日本国の民の心>を取り戻すことが、世直しの方法ということになる。

こうして、「復古」が出てくる。——世直しの方法は、「古のものになっている<日本国の民の心>を取り戻す」の意味の「復古」。

古学は、<日本国の民の心>を、<sup>おのずから</sup>自然の心とする。  
「自然」を「<sup>なおび</sup>直毘」と言い換え、心を「<sup>たま</sup>霊」と言えば、「直毘ノ霊」である。  
またこの意味で、「大和魂」のことばを用いる。

古学はさらに、<日本国の民の心>は天皇を上<sup>に</sup>頂く民の心として実現されるものであるとする。

これを転じると、天皇を上<sup>に</sup>頂くことが<日本国の民の心>の実現だ、となる。

世直しは<日本国の民の心>を取り戻すことがこれの方法であったから、結局、天皇を上<sup>に</sup>頂くようにすることが世直しの方法になる。

——翻って、いまの世の中が宜しくないのは天皇を上<sup>に</sup>頂いていないから。

こうして、幕末維新の平田門人は、勤王倒幕運動を世直しと見る者にな

る。

——いまの世の中が宜しくないのは、徳川幕府が統治しているからである。天皇の統治になれば、世の中は宜しくなる。

『夜明け前』では、主人公は維新が成ることで、木曾の民の生活が宜しくなると思う。

ところが、木曾の森林が官有にされて、民はこれまでのような森林使用ができなくなる。

主人公は、これは事情がお上に知られていないからであり、訴えれば解決してくれると思う。

しかし、そうはならない。

主人公は、幕末維新の<破壊>を自分の都合のよいように見ていたわけである。

既得権の召し上げは、すべての者に及ばねばならない。

時代は、自由主義経済の時代に入ったのである：

《もう何をしようとしてどこに移動しようとして、お構いなした。  
生活が苦しいなら、生活が楽になるよう企業せよ。  
頼むべきは、己の甲斐性だ。》

さて、「復古」を立てる者は、『夜明け前』の主人公の如くである。

彼らは、人の系（生態系）に対する「<sup>なりわい</sup>生業の系の進化」の見方がない。実際、「進化」がわかっているならば、「進化の不可逆性」がわかる。「進化の不可逆性」がわかっているならば、「復古」は言い出されるものではない。

現前の生業の系を合理化するように醸成されるのが、共同体幻想である。「復古」は、この共同体幻想に抗するイデオロギーになる。

ふつうは、共同体幻想の方がこれに抗するイデオロギーよりも強い。実際、イデオロギーの方が強くなって共同体幻想を負かすことは、生業の系を破壊することであり、この結果は<死屍累累>である。——「國體思想」は、これであった。

### 12.3.2 平田門人

個を疎外する共同体幻想を「漢意」<sup>からこころ</sup>と解釈し、これからの自由の形を「古の人にはあった自然（直び）」<sup>おのずから なお</sup>と定める。

これが、古道の考えである。

古道とは、「古の人にはあった自然」という幻想（メルヘン）を立てることである。

幕末期の平田門人は、時の勤王倒幕の運動の高まりに、彼らの「自由」——「古の人にはあった自然」——の実現を重ねる。

こうして彼らは、勤王倒幕の運動に加担する者になる。

このとき彼らは、「革命と自由」の者である。

「革命と自由」の者は、「自由の実現」の形を思考停止する者である。

「敵を倒さないうちは話にならない」のロジックで、思考停止を自らに許す。

「敵を倒さないうちは話にならない」の行為は、思想・立場が関係なくなる。

「敵を倒す」の一点で一致する者は、仲間ということになる。

そして敵が倒れた後、思想・立場の違いから対立することになる。

主流に入り損ねた者は、「こんなはずではなかった」の体で、舞台から降り、そして消えていく。

勤王倒幕運動に加担する平田門人は、この定めに従う。

古学は、これの「尊皇論」が専ら取られて、国学に変質する。——そ

れがもともと古学の方向性（即ち政治論に進むときの形）であったとはいえ。

そして、政治的に利用されていく——「國體」「大和魂」。

### 12.3.3 島崎藤村『夜明け前』

『夜明け前』は、見掛けは歴史小説である。

読み始めると、舞台設定の精密さに先ず圧倒される。

そこで逆に、眉に唾をつけたくなる。

この小説は長編で読むのに時間をとられるので、読み続けるかどうかは書き手を信用するかどうかにかかってくる。

『夜明け前』は、島崎藤村の父がモデルである。

舞台設定も、事実をそのまま写したものである。

これを知って、舞台設定の精密さに納得でき、信用して読んでもよさそうだ、となる。

実際、読後に「よく書き上げたものだ！」の感慨のもたれる作品である。

タイトルの「夜明け前」は、ミスリーディングである。

「夜明け前」は、その時代（幕末維新）に対する島崎藤村の捉えではない。

主人公は、「いまは夜が明けようとしている時だ」と思いたい者である。

この願望をタイトルにしている。

『夜明け前』は、『「夜明け前」』である。

実際、主人公の「いまは夜が明けようとしている時だ」と思いたい気持ちは、ことごとく裏切られていく。

実際、幕末維新は、「夜明け」に比すものではなく、「山火事」に比すものである。

ここで山火事の意味は、山の新陳代謝である。

生態学では、生態系に対する山火事や川の氾濫の類の機能・意義を、「攪乱 disturbance」と謂う。

生態系は進化するものであり、攪乱は進化の契機である。

「新陳代謝」と言ったが、これはゼロに帰ってのリセットとは違う。

実際、出発点になる焼けた山は、ゼロではないわけだ。

生態系にリセットというものは無い。

「生態系にリセットというものは無い」——この認識は重要である。

『夜明け前』に引き寄せて言えば、「復古」など考えるのは大きな勘違いということである。

古学は、実践論に進み、この勘違いをやる。そして「国学」に変質する。

主人公は、平田門人であり、「復古」イデオロギーに傾倒する者である。

主人公は、幕末維新で進行していることは古道の謂う「自然」「直おのずからびなお」の実現過程だと思いたい。

島崎藤村は、「古の心」として「自然・直び」を立てる者ではない。

一方、「自然・直び」が論考の方法論に汲まれているふうである。

実際『夜明け前』は、生態学の趣きを呈している。

——<幻想>の生態学、<攪乱>の生態学。

### 12.3.4 幻想と現実のダブルバインド

ひとは、幻想と現実認識を両立させることができる。

それは、幻想の引き出しと現実認識の引き出しを別々に持っているふうである。

肝心なことは、一度に両方を開けないことである。

しかし、自分の間違いから、あるいは外から追い詰められて、両方の引き出しを同時に開けてしまうことがあり得る。

これは、一方を立てれば他方が立たずのダブルバインド状態である。

ダブルバインドの状態に自分をずっと措くと、ひとは精神を病む。

島崎藤村の『夜明け前』の主人公は、これである。

平田門人として、平田篤胤のことばと現実のギャップ・背反に悩む。

そして発狂してしまう。

『夜明け前』にわれわれが読むべきもの、それは、真面目に幻想したらダメだということである。

また、師（アジテーター）とは罪なものだということである。

——結論は、「無頼の者（主体）であれ」



### 12.3.5 憂国

島崎藤村『夜明け前』で描かれた「幕末維新の平田門人」は、「憂国」の者である。

憂国は、傲慢の裏返しである。

自分を<絶対>にすることから、自分の意に沿わない者はみな悪か愚になる。そして、自分以外の者はもともと自分の意に沿わない者であるから、世の中が悪・愚になる。

憂国者の傲慢は、<自信>に由来するものではない。

師や天子に託する<sup>てい</sup>体の傲慢である。

師・天子とは、<正しい>を持つ者である。

世の中は、師の説く<sup>てい</sup>当為から外れる。天子の意から外れる。

したがって、世の中は<不正>である。

憂国者は必ず師・天子を頂いている。

そして、逆も真となる。

即ち、師・天子を頂く者は必ず憂国者になる。

<正しい>を立てれば世の中は<不正>になるわけである。

## 13 「現成」

13.1 「現成」 幻想

13.2 例：国学

## 13.1 「現成」 幻想

### 13.1.1 「自己組織化する系」

### 13.1.2 「神」

### 13.1.3 「無為」

### 13.1.1 「自己組織化する系」

科学は存在論を進化論的につくる。

存在を「自己組織化する系」と見るわけである。

「自己組織化」は、不可逆的過程であり、「進化」過程ということになる。

このとき現前は、「系のダイナミクス」という理がその都度実現されている相である。

したがって "No more than this" である。

この考えは、「現成」——「現前は道理の成就」——である。

科学は、現成論ということになる。

### 13.1.2 「神」

生きることは、いろいろ難儀である。

ひとは、難儀を軽くしたいと思う。

難儀は、難儀の意味・理由がわからないことが難儀である。

そこで、難儀の意味・理由がわかることが、難儀を軽くすることになり得る。

ここに、宗教の出番がある。

宗教は、難儀を「定め」と説く：

「難儀には、奥深い意味・理由がある。

実際それは、神の配慮である。

ひとにその配慮は理解できないから、神に自分を委ねよ。」

ひとは、これを聞いて安心する。

「これでは何も解決してない」と思ってはならない。

まさに、「人はパンのみにて生きるものに非ず」というわけである。

ひとは、不条理が耐えられない生き物である。

納得の境地を得れば、死を観念することも易い。

そしてひとは、「神の配慮」の考えを受け入れる素地を、既に形成してきている。

自然に対して抱く「完璧」の感情である。

「The year's at the spring

And day's at the morn;

Morning's at seven;

The hill-side's dew-pearled;

The lark's on the wing;

The snail's on the thorn:

God's in His heaven--

All's right with the world! 」 (Browning)

「天網恢々疎にして漏らさず」(老子)

宗教は、現成論(「現前は道理の成就」)になる。

現前は、神の理の現れでなければならないからである。

ちなみに、下手な宗教の下手は、＜言い過ぎる＞に有る。

ことばを多くすると、矛盾を言うことになる。

現実と背反することを言ってしまう、になるのである。

### 13.1.3 「無為」

現成論は、「無為」を説く趣きになる。

つぎは、禅の物言い：

「災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候。

死ぬる時節には死ぬがよく候。

是はこれ災難をのがるる妙法にて候」（良寛）

## 13.2 例：国学の現成論

13.2.1 現成論

13.2.2 実践論

### 13.2.1 現成論

国学は、『古事記』を真言とする。

『古事記』の神々を立てる。

こうして、国学は宗教になる（「復古神道」）。

宗教は、現成論になる。

宗教となった国学は、は、現成論を説く立場になる。

つぎは、その語り様である：

本居宣長『玉くしげ』

さて又上に申せるごとく、世ノ中のありさまは、萬事みな善惡の神の御所爲なれば、よくなるもあしくなるも、極意のところは、人力の及ぶことに非ず、  
神の御はからひのごとくにならでは、なりゆかぬ物なれば、此根本のところをよく心得居給ひて、たとひ少々國のためにあしきことととも、有來りて改めがたからん事をば、俄にこれを除き改めんとはしたまふまじきなり、

改めがたきを、強て急に直さんとすれば、神の御所爲に逆ひて、返て爲損ずる事もある物ぞかし、

すべて世には、惡事凶事も、必<sup>ズ</sup>まじらではえあらぬ、  
神代の深き道理あることなれば、とにかくに、十分善事吉事ばかりの世ノ中になす事は、かなひがたきわざと知ルべし、

然るを儒の道などは、隅から隅まで掃清めたるごとくに、世ノ中を善事ばかりになさんとする教にて、とてもかなはぬ強事な

り、

さればこそかの聖人といはれし人々の世ととも、其國中に、絶て惡事凶事なきことは、あたはざりしにあらずや、

又人の智慧は、いかほどかしくても限ありて、測り識りがたきところは、測り識ことあたはざるものなれば、善しと思ひて爲ることも、實には惡く、惡し<sup>ト</sup>と思ひて禁ずる事も、實には然らず、

或は今善き事も、ゆくゆくのためにあしく、今惡き事も、後のために善き道理などもあるを、人はえしらぬことも有りて、すべて人の料簡にはおよびがたき事おほければ、とにかくに世ノ中の事は、神の御はからひならでは、かなはぬものなり、

本居宣長『玉くしげ』

抑かやうに、西の方の外國より、さまざまの事さまざまの物の渡り入來て、それを取用ふるも、みな善惡の神の御はからひにて、これ又さやうになり來るべき道理のあることなり、……

さてさやうに、世ノ中のありさまのうつりゆくも、皆神のみ所爲なるからは、人力の及ばざるところなれば、其中によるしからぬ事のあればとても、俄に改め直すことのなりがたきすぢも多し、

然るを古への道によるとして、上の政も下々の行ひも、強て上古のごとくに、これを立直さんとするときは、神の當時の御はからひに逆ひて、返て道の旨にかなひがたし、

されば今の世の國政は、又今の世の模様に従ひて、今の上の御

掟にそむかず、有り來りたるまゝの形を頹さず、跡を守りて執行ひたまふが、即ちまことの道の趣にして、とりも直さずこれ、かの上古の神隨治め給ひし旨にあたるなり、

平田篤胤『古道大意(上)』

神と申すものは、とんと一様に定めては申しがたい物でござる。  
……

悪しき神とても、悦んで御心の御なごみ遊ばしたる時は、幸ひ恵み給はるることの絶えて無いと申すでも有るまいでござる。

又人の上にとりては、其しわざの差當<sup>さしあたり</sup>ては悪しく思はれることも、誠には善く、善いと思はれる事も、實<sup>まこと</sup>には悪き理の有るなども有ろうでござる。

すべて人の智<sup>さと</sup>は限りが有て、眞<sup>まこと</sup>の理は得知れぬ物じゃに依て、とにかくに神の御上は、猥<sup>みだ</sup>りに測り云うべき物ではないで、況<sup>まし</sup>て善いも悪いも、いと尊<sup>すぐ</sup>く殊<sup>たち</sup>れたる神等の御上に至りては、最も最も靈<sup>あやし</sup>く奇々妙々に座ますに依て、更に人の小さき智慧を以て其理などは千重の一重も測り知るべきことではない。

唯その尊きを尊び、かしこきを畏<sup>かしこ</sup>み、恐るべきを恐れて有べきものでござる。

### 11.3.4 実践論

現成論は、「無為」を説く趣きになる。

これは、つぎの反発を受ける：

「然らば何事もたゞ、神の御はからひにうちまかせて、よくもあしくもなりゆくまゝに打捨おきて、人はすこしもこれをいるふまじきにや」(平田篤胤『古道大意(上)』)

実際、この問いに対する答え方のいろいろが、現成論のいろいろになる。

つぎは、禪の物言い：

道元『正法眼蔵』「現成公案」

麻浴山(まよくざん)實徹禪師、あふぎをつかふちなみに、僧きたりてとふ。

「風性(じょう)常住、無處不周」なり、なにをもてか、さらに和尚あふぎをつかふ。

師いはく、なんぢただ「風性常住」をしれりとも、いまだく「ところとしていたらずといふことなき」道理ををしらずと。

僧いはく、いかならんかこれく「無處不周底」の道理。

ときに、師、あふぎをつかふのみなり。

僧、禮拜す。

佛法の證驗、正傳の活路、それかくのごとし。

「常住なればあふぎをつかふべからず、つかはぬをりもかぜをきくべき」といふは、常住をもしらず、風性をもしらぬなり。

言うところは：

「そのときにはそのときの行動が現れる。これも〈現成〉のうち。」

そしてつぎが、国学の言い方である：

本居宣長『玉くしげ』

然らば何事もたゞ、神の御はからひにうちまかせて、よくもあしくもなりゆくまゝに打捨おきて、人はすこしもこれをいるふまじきにや、と思ふ人もあらんか、

これ又大なるひがことなり、

人も、人の行ふべきかぎりをば、行ふが人の道にして、そのうへに、其事の成と成ざるとは、人の力に及ばざるところぞ、といふことを心得居て、強たる事をば行ふまじきなり、

然るにその行ふべきたけをも行はずして、たゞなりゆくまゝに打捨おくは、人の道にそむけり、

此ノ事は、神代に定まりたる旨あり、

大國主命、此ノ天下を皇孫尊に避奉り、天神の勅命に歸順したてまつり給へるとき、天照大御神高皇産靈大神の仰せにて、御約束の事あり、

その御約束に、今よりして、世ノ中の顯事は、皇孫尊これを所知看すべし、大國主命は、幽事を所知べしと有りて、これ萬世不易の御定めなり、

幽事とは、天下の治亂吉凶、人の禍福など其外にも、すべて何者のすることと、あらはにはしれずして、冥に神のなしたまふ御所爲をいひ、顯事とは、世ノ人の行ふ事業にして、いはゆる人事なれば、皇孫尊の御上の顯事は、即チ天下を治めさせ給ふ

御政なり、

かくて此ノ御契約に、天下の政も何も、皆たゞ幽事に任すべしとは定め給はずして、顯事は、皇孫尊しろしめすべしと有ルからは、その顯事の御行ひなくてはかなはず、又皇孫尊の、天下を治めさせ給ふ、顯事の御政あるからは、今時これを分預かり給へる、

一國一國の顯事の政も、又なくてはかなふべからず、

これ人もその身分身分に、かならず行ふべきほどの事をば、行はでかなはぬ道理の根本なり、

さて世ノ中の事はみな、神の御はからひによることなれば、顯事ととも、畢竟は幽事の外ならねども、なほ差別あることにて、其差別は譬へば、神は人にて、幽事は、人のはたらくが如く、世ノ中の人人は人形にて、顯事は、其人形の首手足など有りて、はたらくが如し、

かくてその人形の色々とはたらくも、實は是しも人のつかふによることなれども、人形のはたらくところは、つかふ人とは別にして、その首手足など有りて、それがよくはたらけばこそ、人形のしるしはあることなれ、

首手足もなく、はたらくところなくては、何をか人形のしるしとはせん、

此差別をわきまへて、顯事のつとめも、なくてはかなはぬ事をさとるべし、



## 14 「あの世」

14.1 救済の「あの世」幻想

14.2 スピリチュアリズムの「あの世」幻想

14.3 「あの世」存在論の思考停止

### 14.1 救済の「あの世」幻想

「生きているのはつらいことばかり、なんでこの世に生まれてきたのか」と嘆く者は、「あの世」の説法で救われる余地がある。

「この世は、仮の世である。

本当に生きる場所は、あの世である。

そして、あの世によいことが待っている。」

### 14.2 スピリチュアリズムの「あの世」幻想

スピリチュアリズムに嵌まる科学者を見ることがある。

科学の手詰まりを神秘主義に短絡し、さらにスピリチュアリズムに進む、というものである。

商品経済社会の合理主義に疎外されている者も、スピリチュアリスト予備軍である。

この場合、「禅」とか「ヨガ」がポピュラーな受け口になっている。

### 14.3 「あの世」存在論の思考停止

救済の「あの世」は、死後の世界である。

スピリチュアリズムでは、心霊の所在が「あの世」にあたる。——心霊に対しこの世のものと同じように存ると考えることは、無理がある。

いずれの場合でも、「あの世」幻想者は、本来、「あの世」存在論の構築を負う。

しかし彼らは、この課題には思考停止する。

実際、存在論をやれば、論理矛盾だらけになって、「あの世」幻想を保てなくなる。

## 15 「虚無」

15.1 「虚無」 幻想

15.2 「神は死んだ」

## 15.1 「虚無」 幻想

ひとは<生きる>を、<意味・価値・目的を重んじる>という形につくる。  
意味・価値・目的を立て、<意味・価値・目的を重んじる>を立てること  
とは、共同体幻想である。

意味・価値・目的は、作為である。  
そこで<生きる>は、意味・価値・目的がルールのゲームである。

自分の<生きる>がゲームであることを見るのは、虚しい。  
そこで、ひとは、<抑圧>という無意識の機序を以て、意味・価値・目的  
が作為であることを見ないようにする。  
これが「社会的振る舞い」である。

幻想は、挫折する。  
実際、虚構は挫折へ導くのが道理である。  
挫折した者は、幻想に対し「斜に構える」をポーズする。

この者は、幻想を「虚無」に解釈していることになる。  
この「虚無」は、また一つの疎外幻想である。

幻想は、機能している。  
機能しているからこそ、存在している。  
幻想は、あるべくしてある。  
幻想の存在身分は、「虚無」ではない。

## 15.2 「神は死んだ」

「国破山河在」  
この句を愁嘆の表情で詠むのが、杜甫。  
しかし、この句を独り取り出せば、別の表情も思い浮かんでくる。  
感動の表情である。  
国という幻想が消えて、いま山河が見える自分がここにいる。  
「なんだ、これじゃなか！」

「神は死んだ」  
神という幻想が消えて、いま生活が見える自分がここにいる。  
「なんだ、これじゃなか！」

「彼はこの夕べ、なにごとによらず長くみっちり考えたり、思想を集中  
させたりすることが出来なかった。いま彼は何ごとにもせよ、意識的  
に解決することが出来なかったに相違ない。彼はただ感じたばかりで  
ある。弁証の代わりに生活が到来したのだ。従って意識の中にも、何  
か全く別なものが形成さるべきはずである。」

『罪と罰』（米川正夫訳、新潮文庫、1951）

幻想が消えた先は、虚無ではない。  
幻想が隠してきた生<sup>なま</sup>が現れる。  
豊穡な相で、生が現れる。

一方、これはインテリの独り相撲でもある。

インテリとは、生に疎い者である。

生と密な者は、インテリの独り相撲とは無縁である。——インテリの独り相撲に翻弄される存在でもあるが。

人の文化人類学的進化は、「<アニミズム>から<交換価値>へ」である。

<アニミズム>は、ひとが生と密なステージである。

<交換価値>は、生が交換価値に記号化されるステージである。

生と密な者は、生の多様な相に翻弄される。

この多様な相に、気分・意図・配慮を感じる。

この気分・意図・配慮の主体を立てる（これが「アニミズム」の意味）。

神である。

この場合、神は個々の事物に対して立てることになる。

こうして、アニミズムの神は「八百万の神」である。

<交換価値>のステージでは、ひとは拝金主義になる。

しかし、金は記号であり、中身は空ろである。

この空ろに、形而上学的に悩まされる者が現れる。

インテリである。

交換価値に空ろと人の煩惱を見て、解脱を考えるインテリが現れる。

ブッダは、このタイプの一人である。

交換価値にニヒリズムの影を見て、絶対真理を考えるインテリが現れる。

キリストは、このタイプの一人である。

解脱の教えは、救済の神を立てる宗教になる。

絶対真理の教えは、絶対真理としての神を立てる宗教になる。

これらの神は、<アニミズム>の神——「八百万の神」——に対するところの、<交換価値>の神である。

宗教は、布教が実践課題になる。

大衆を説教するわけだが、大衆はインテリの形而上学とは反りが合わない。

実際、大衆とは生に密な者の謂いである。

そこで、大衆のアニミズムを取り入れる方向に進む。

反りの合わないところを、大衆の持ち前のアニミズムで埋めようというわけである。

これは、宗教が呪術的に装飾されるということである。

仏教だと、密教がこれの典型になる。

キリスト教だと、エクソシズムである。

大衆は、根っこのところは、アニミズムである。

宗教に対する魅力は、呪術である。

仏寺観光は、密教の仏寺になる。

浄土真宗みたいなのは、だめ。

映画になるキリスト教は、エクソシズムである。

これはカトリックである。新教はだめ。

こうして、宗教は、教祖が斥けたところのものに自ら収まるようになる。

これは、大衆宗教になろうとする宗教の宿命である。

＜交換価値＞の神も、安泰ではない。

科学の発展が、神を虚偽の存在にしていく。

「神は死んだ」

ここで死んだ神は、＜交換価値＞の神である。

ニーチェは、「神は死んだ」のつぎがニヒリズムになることを警戒する。

そこで、現世を説く：

「神は要らないし、ニヒリズムになることもない。

現世がちゃんとあるじゃないか！」

しかし、ニーチェの危惧も、インテリの独り相撲のうちである。

大衆はずっと現世主義である。

ただ、国柄・土地柄として、現世主義の強弱がある。

「日本型」を立てるとすれば、このあたりに関してである。

「日本型」は、「八百万の神」が根強くて、これが＜交換価値＞の神に対する抵抗力になる。

＜交換価値＞の神一色のようにはない。

よって、＜交換価値＞の神が死んでも、どうということはない。

実際、科学は＜交換価値＞の神を死なすが、「八百万の神」に対してはこれを復権するように働く。

復権された「八百万の神」は、「系の理」である。

ひとは、複雑系の科学や生態学に「八百万の神」を見出し、これに感服する。

もっとも、＜交換価値＞の神も、簡単に死ぬわけではない。

科学を偽装して現れてくる。

かくして、世の中は、＜交換価値＞の神と「八百万の神」のせめぎあいである。

実際は、シンクロのダイナミクスが働くので、行ったり来たりの振り子運動を現すことになる。

「国破山河在」は、繰り返されるのである。

日本の学術は、生に疎いインテリの棲むところであるから、＜交換価値＞の神に傾倒するようになっている。

欧米物移入一辺倒になるのには、理由があるわけである。

この欧米一辺倒は、学校教育に降りると、行ったり来たりの振り子運動を現す。

教育現場は、生に密な者の棲むところだからである。

＜交換価値＞の神と「八百万の神」のせめぎあい、そしてこれの均衡安定相としての振り子運動は、ここで起こる。

文科省の約10年ごとの指導要領改訂、数学教育だと「数学的〇〇」の約20年ごとの新装はこれであり、一般に新規キャンペーンのライフサイクルがこれである。

## 16 閉じ

### 16.0 おわりに



## 16.0 おわりに

このテキストにあるテーマは、手を変え品を変え、これまでずいぶんと論じてきたものである。

本テキストは、まとめのつもりでつくった。

「もうじゅうぶん、これでおしまい！」というわけである。

まとめなので、この手のテーマに馴染みの薄い読者には、ずいぶん不親切なテキストになっている。

読者はまた、このテキストの文体に拒否反応してしまうかも。

わたしにしても、最初からこんな文体でものを書いてきたわけではない。<ロジックの吟味>と<過程を細かく刻む>が相応じ、段々とうようになったようだ。

それにしても、外観は歌詞ですね ^ ^ ；

カラダがもう、<語る>ではなく、<うたう>になっているということ？

さて、本論考は、いささかも遠慮がない。

これは、特長ということになる。

知るべし：

現役で論文を書く者は、ひとに気を遣って書くことが義務である。

退役のくせに論文ごとをやるような者は、ひとに気を遣わないことが義務になる。

但し、本論考はなにをも批判していないということに、よくよく注意し

て欲しい。

本論考を、「天の配剤」を説いていると読まれよ。

現にあるものは、どれも然るべくしてある。

然るべくしてあるものを批判するのは、阿呆のすることである。

宮下英明 (みやした ひであき)

1949年、北海道生まれ。東京教育大学理学部数学科卒業。筑波大学博士課程数学研究科単位取得満期退学。理学修士。金沢大学教育学部助教授を経て北海道教育大学教育学部教授(数学教育専門), 2015年退職。

註：本論考は、つぎのサイトで継続される(これの進行に応じて本書を適宜更新する)：

<http://m-ac.jp/thought/illusion/>

## 幻想論

---

2018-10-17 初版アップロード (サーバー : m-ac.jp)

2018-11-05 更新

著者・サーバ運営者 宮下英明

サーバ m-ac.jp

---

<http://m-ac.jp/>

[m@m-ac.jp](mailto:m@m-ac.jp)

---

